

## 玄海灘におけるイルカ漁と漁業組織

(Catching Dolphins at Genkainada Sea)

中村羊一郎

Yoichiro NAKAMURA

(平成十六年十月十二日受理)

日本においては古く縄文時代からイルカ<sup>(1)</sup>を捕獲し貴重な食料として利用してきた。その伝統は近年まで引き継がれ各地でイルカ追い込み漁が実施されていたが、食料事情の改善と食の多様化、さらにイルカを自然保護の象徴とみなす風潮のなかで、村をあげての組織的なイルカ追い込み漁はほとんど消滅した。長い間にわたって日本人の食生活を支えたイルカについては、生物学の分野での研究に比して、歴史・民俗の分野からのまとまった研究はほとんどない。わずかに日本各地におけるイルカ漁に関する個別文献を一巻にまとめた谷川健一編の『鯨・イルカの民俗<sup>(2)</sup>』がある程度である。ちなみに、イルカ追い込み漁とは、回遊してくる暖流性のイルカの群れを湾内に追い込み網で囲って退路を断ち、海岸に引き寄せつつ一斉に捕獲する漁法である。関連地域の船や人がほとんど参加することもある大規模なもので、その運営のため一般漁協とは別に「海豚組合」を組織している例が多い。獲物の配分については、独自の慣行があり、また実働部隊としての青年たちの役割も大きい。こうしたイル

カ追い込み漁に際しては、捕鯨と同様、海岸において祝祭的な興奮が現出し、イルカ漁そのものが単なる食料の獲得という以上の意味をもったと考えられる。さらにイルカには特別な信仰が寄せられていたことが、各地の伝承で明らかにされている<sup>(3)</sup>。

イルカ追い込み漁は南は沖縄県名護市、そして太平洋側では岩手県山田町まで、日本海側では石川県の能登半島にいたる全国各地で行われていたが、本稿はそれらのうち九州北部と五島列島海域におけるイルカ漁の実態とその漁獲のための組織について、現地調査と文献を総合して地区ごとにとまとめたものである。いづれ全国すべての地区についての実態をまとめる予定であるので、本稿はその第一報として位置づけたい。

### 一 肥前飯屋湾のイルカ漁

佐賀県松浦半島の東側は唐津城のある唐津湾、西側は飯屋湾である。半島の先端部にある呼子町の沖合に浮かぶ小川島は近世から捕鯨漁の基地として栄えた。天保十一年(一八四〇)に著された『小川島捕鯨絵巻』は当地の捕鯨業の実態を示すものとして名高い。この絵巻は捕鯨のみの記述であるが、唐津藩の諸産業を挿絵入りで記録した『肥前州産物図考<sup>(4)</sup>』には捕鯨と並んで「江猪(江豚)」漁の様子が、付図とともにきわめて具体的に描写されている。漁の場所は特定できないが、九州沿岸における詳細な記録として注目される。著者は木先盛標(悠々軒)で成立は安永から天明にかけての頃とされるからおおよそ十八世紀後半の状況を示すものとみてよい。本章では最初にこの松

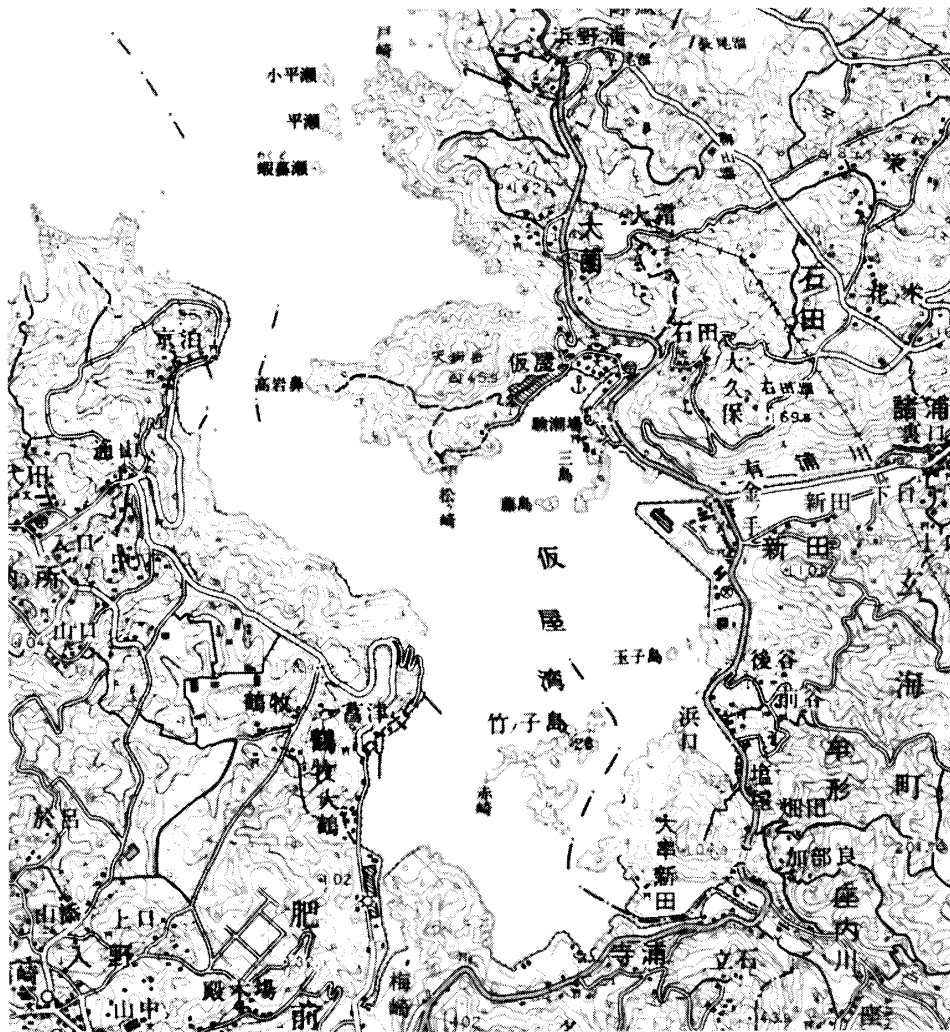


図1 仮屋湾 (5万分1地型図「唐津」より)

浦半島西岸、つまり仮屋湾において戦前まで行われていたイルカ漁について報告するとともに、『肥前州産物図考』(以下『図考』と略称)による近世のイルカ漁の様子とも比較してみたい。

# 1 仮屋湾の漁業

仮屋湾は南に向かって深く切れ込んでいて追い込み漁にふさわしい地形をしているが、沿岸集落のうちイルカ漁に関わった集落は三か所だけである。それは湾内の東岸に位置する玄海町

仮屋、西岸にある肥前町京泊と菫津で、総称して三ヶ浦(さんがうら)と呼ばれ、常に共同でイルカ漁にあたった。三ヶ浦がいかなる理由でイルカ漁の権利を得たのかははっきりしないが、他の集落はイルカが来ても捕獲できないので見物するだけであつたという。現在ではイルカ漁は行われないが、ときたまイルカが湾内に入っていることがある。するとナマコを全部食われてしまう(現在この湾はナマコの生産に力を入れていて、年間に三〇五万のナマコを放流している。冬が一番の漁期であり、イルカの回遊時期とほぼ一致する)。今どきのイルカは漁師にとって「海のギャング」ということになる。ただしイルカの群れが沖を通るとイワシが湾内に入ってくることもあり、これは「イルカヨセ」といって歓迎される。かつてイルカ漁をしていた頃には、「イルカは必ずお礼参りにくる」といわれていた。その意味は明確に伝承されていないが、現在の解釈では、「ここでとれたら必ず来年も来る、仲間がとれた所に必ず来る」という意味だとされる。イルカが来るのは春先の二月末から三月上旬が多い。

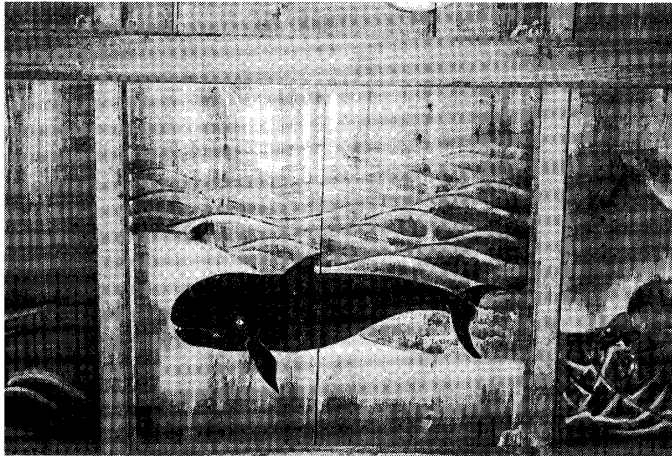


図2 鎮守神社拝殿天井に描かれたイルカ  
(長崎県東松浦郡肥前町葛津、1995年10月撮影)

昔はイルカをとること自体が面白かったと語られる。常には区長が保管しているほら貝が鳴らされると畑仕事の最中であらうと出なければならなかった。イルカ群を網で仕切ると三ヶ浦の人が全部集まる。お祭りは一集落の行事だが、イルカは全部の村の行事となる。普段集まる機会のない三ヶ浦の人々がイルカのおかげで寄らせてもらえる。以前の組織は集落単位であったが昭和三〇年に三ヶ浦の組合が合併して肥前漁協となった。昭和三〇年代に行われた最後のイルカ漁の時には水族館に何匹か売ったことがあり、テレビでお金が儲かったような報道をされたが大赤字だったという。

この三ヶ浦にとつては、イルカ漁は臨時的なものであつて漁業の中心はイワシ網である。そこで最初にイワシ漁について略述しておく。イワシは、その大きさによって段階を追った言い方がある。①チリメンジャコ、②カエリ(腹白になったばかり)、③ギンダレ(うろこが白い)・セグロともいう、④ショウジョウ、⑤

ショウ(小)。仮屋でのイワシ漁はほぼ通年で行われる。シラアミはカタクチイワシを対象としクンチ前(旧暦の九月二九日)に始まり三月頃までである。シラアミとは魚を溜める部分が白いからと説明されるが、シラス網のことであらう。シラアミの構成は、オヤブネ(二ハイ)、デブネ(二ハイ)で一組となり、仮屋には全部で五統あつた。六月からマイワシを対象に夏中行われた夜間のタキヨセアミも五統あつた。沖で漁があると、テブネ(母船)に載せて岸に持つて帰り、すぐ処理する。網の持ち主をアミダンナン(網元)、漁夫をアミコといった。

三月から五月にはモージャを対象とするモジアミの漁期となる。網は長崎の方面から仕入れた。音戸方面から入ったと聞いている。素材は麻でカッチ(茶色がかつた染料)を用い大釜で煮て染めた。梅雨に入ると網が干せないで自然休漁となる。梅雨明けからアキヨセ網が始まり、さらに秋にはジンダ(小鰯)を狙うジンダ網が行われた。捕れたイワシは現物で配分し、個人で茹でてから干してイリコにした。多い時は生でスボシにし干鰯として農家の肥料に売った。伊万里の魚屋が生でもっていったこともあつた。その他に鯛のナガノ釣りや一本釣も行われた。「藤の花が割いたらミズイカが来る」といい、四月末から五月の頃にとれるミズイカは大きくて美味しい。一九九五年当時、仮屋では鯛を年間で三五、六万尾出荷している。なお葛津では昭和一六年の寒い頃(二月か)にシビがあがり、それを売った金で藁網を作ったことがある。三ヶ浦のなかでは仮屋は値賀崎までの漁業権をもっていたが葛津は外浦の権利はなかった。京泊は百トンくらいの小さな船の船乗りが多かった。

この地区では芋・麦・大豆などの農業も生活の重要な柱であ

る。仮屋では田が全部で一〇町歩(二〇軒が所有)、畑は一軒あたり二、三反から五反くらいまでで、いつときミカン栽培が行ったが今はそのミカン畑も衰退し、ミカンを作るよりも漁に出た方が収入が多いとされる。

漁に関係する信仰を見ると仮屋では戦争前で千円の水揚げがあると、センゴシイワイ(千超祝い)といって、船でお宮(三島神社)の前を三回まわったという。漁神であるエビスは、仮屋漁協前の岸壁近くの屋根掛けをした中に石像七体が祭られており、青や赤で彩色されている。この他に金比羅・弁天・龍宮様を祭る。龍宮様は近くの民家の海端に祀っており、沖への出入りに際してアワビや魚をあげていた。別のエビス様は青年クラブの中にあり、藁でカケイオを吊るして供えた。いっぽう菖津の氏神は鎮守神社といい今も旧暦を守って祭礼は旧九月二九日のクンチである。神社の拝殿の格天井には種々の絵が描かれているが、その中に明らかにゴンドウと思われるイルカの絵が一枚ある。エビスはハト(港)の先端に祭ってあるが、色を塗ることはない。

## 2 イルカ漁の実際

次にイルカ漁の実際を仮屋居住の中島亀久重さん(明治四四年生まれ)、西正数さん(同)、西広太さん(明治四〇年生まれ)の話からまとめてみる。三人が育った頃の仮屋は一五〇〜一六〇軒くらいの半農半漁の村であった。たいていは自分の家で仕事をし、次三男は奉公に行くのが普通で、戦後のいつとき、大阪・名古屋・神戸方面に出稼ぎに行く人もあった。青年は一二〇人くらいいた。一六歳で青年団に入ると「一人前」、入らない

ものは半分扱いだった。学校卒業とともに青年の集会の時に前に並ばされて入会した。三年間はコワツカイモノと呼ばれ夜は二四畳敷きの青年クラブに泊り込んだ。以前は個人の家を借りて泊り込んだが、それをコヤド、セイネンヤド呼んだ。四年以上を「ヒランワカッシ」といい二五歳(戦後)になるか結婚したら抜けた。昔は独身者は二八歳まで入っていた。青年の会合に遅れたりすると、「ゴザカラスワル」といって除名され、一人前を貰えなくなる。長髪やタバコは禁止されていた。後述するように冬の海に入ってイルカを岸に向けるのはこのような青年たちの役割であった。

仮屋湾ではイルカを「ユルカ」と呼ぶ。種類は①シラタコ(腹が白い。人でカタゲルⅡ担げるくらいの大きさ)、②ハンドウニュウドウ(ゴンドウのことらしい、大きく、重さは一五〇〇〜一六〇〇斤くらいあった)の二種類である。仕切網を用いた大規模なイルカ漁は戦前までのことで、現在ではイルカが湾内に入ったらナマコは全滅といわれており、イワシ漁の邪魔にもなるので追いはらう。

昭和三年一月五日に仮屋の浜に揚げたのが大規模なイルカ漁の最後の記憶である。この時は最初からイルカを狙ったわけではなく、偶然発見された群れを追いついた。イルカを追いついたのはウラガシラと呼ばれる場所で、入江の一番奥にあたる。当時は浜であったが、現在は埋め立てられ漁協が建っている。この時はハンドウニュウドウが三〇〇頭以上あがり、一週間かかって処理した。この大漁の時は肥前(菖津など対岸の集落のこと)がトリアミをもっていたため仮屋よりも分け前が多かった。そこで仮屋でも皆で材料を買ってきて

網を編んだ。しかしその後大漁はないままに網は現在も倉庫(もとの消防小屋)にまとめて保管してある。実際にのぞいてみたが長さは一〇〇メートル以上もありそうだった。ここでは昭和二二年頃にほんの二、三頭とれたのが最後ではなかったかという。

イルカの群れが湾内に入った時、まずシラアミ(いわし網で目は三尺)で仕切り、最後にイルカトリアミで囲った。この網は麻製で縄の太さは五ミリくらい。網目は四、五寸である。沖の方でイルカを発見した者は、あとでミチン(見質)といってイルカを一本もらえる。最初に発見した者が声をあげ、竹竿の先に布をつけて合図とする。皆が寄つて来たとき、真先に網を入れた者には、センアミチン(先網質)といって特別な分け前がある。追い込む場所は地形の関係でいつも仮屋の方となる。イワシの漁場は湾内各所で、それぞれが漁をしている。そこにイルカの群れが入ってくることになるので捕獲のための反応は早い。

仮屋ではイルカを取り上げるのは青年の役目である。裸になつて海に入り、イルカをオカの方に向けると自然にその方向へ向かつて行く。青年たちはシャツ一枚は着ていたが、冬の海であるから非常に冷たい。しかしイルカはぬくもった(温かい)からわざと抱きついたものだが、こういう時にイルカはおとなしかった。追い上げるうちイルカの体半分ほどがオカにあがつたらロープをかけて大勢で引っ張る。昭和三年のときにはウラガシラに置ききれなくなつて、近くの田の浦にもあげた。オカにあげたイルカはまず鎌で腹を割いた。鎌の柄は長さ一尋くらいで専用の刃をつけたものだが名称はとくになかった。あとは

包丁で処理した。腹を割つて内蔵を取り出すと一メートルくらいの胎児が入っていたこともある。作業中にイルカのオバキ(尻尾)で払われて大怪我をした人もいる。青年たちは海からあがつたら浜で火にあたつて暖をとり、粥を炊いて酒を飲む。イルカの身は「シオケ」として配分した。シオケとはオカズという意味である。配分内容などの詳細は不明だが青年団としても配分を受けていたようで、これをヌレシオといった。なお、若い衆がカンダラといって、イルカに縄をつけて海に沈め海面に印を浮かべて置いてあとで引き上げて売り払った。

つぎはやはり三ヶ浦のひとつ、対岸の葛津在住の宮崎兼一さん(大正九年生まれ)、宮崎孝俊さん(昭和一三年生まれ)、宮崎武士さん(昭和三年生まれ)から聞いた話である。

イルカの群れは年に何回かやって来るが、葛津は仮屋湾のいちばんウラソコに位置するので、ここで群れを発見しても間に合わない。湾口にある京泊で発見したイルカが湾内に入ると、連絡を受けて一斉に行動する。高い所から見ている笹の枝でもって網を入れる所を指示する。三〇〇〜四〇〇間くらいの網で仕切る。仕切りの網はイワシ網(船引き網)で三尺目である。これで仕切つて最後はトリアミで囲む。トリアミの目は三寸から三寸五分。縄の太さは五ミリ、素材はオー(苦)を手ですいて本目編みとした。これとは別にカリマタという編み方もあつてその方がずれにくいというが、ホンメの方が網が水中で立ち易いという。

葛津は、①船当津(フナトツ)、②堂脇(ドンワキ)、③中組、④浦口の四組に分かれていて一組が一四、五軒からなる。この組ごとにトリアミとトリカギを用意してある。トリアミ一枚は

長さ、深さともに五間ほどで、海の深さや捕り方に合わせ、持ち寄った現場でロープを使って仕立てた。イルカが競り合うと、どうしても底が浮いてくる。オモリのことをアジ(沈子)、浮きのことはアバという。トリアミの深さは八尋(ヤヒロ)、びつしり並べた船に網をくくりつけて船をアバのかわりにする。網の綱を引く人が両岸に並び、「ヨイト、ヨイト」と掛け声をかけながら引く。トリアミの上にイルカを乗せる形になる。トリカギはトビグチ様のもので刃はついていない。柄はカシの木で長さ一間半。イルカが思うように動かないときに使う。網を引いてイルカを寄せ、乳下くらいの深さになったところで人間が二、三人で組になって海に入り、イルカを浜にあげた。葛津でも、イルカは温かいので「よかオナゴに抱きつくよりも気持ちよかった」という感想をもらす人がいた。自分が冷えているためイルカの体がホッカホカと気持ちよく感じたのである。シラタコ・マイルカ、ハンドウ・ゴンドウ、ネズミの三種類があった。シラタコは知恵があつてとりにくいといわれる。

漁獲物の配分では、全体の中から必要部分をのけ、あとを戸数と出た人数によって集落ごとにわけける。そのなかからシオケが全戸に配分される。葛津ではそのシオケワケに際してメクラクジという方法を用いた。これはイルカに限らず、ほとんどの漁に際して分け前を配る時の方法である。まず戸数分にイルカの肉をわけ、ある人が後ろをむく。そして別の人が並んだ肉のどれかに触れて「これはだがすか？」と声をかける。すると後ろを向いた人が、たとえば虎雄さんなら、「トラ」といえば、それは虎男さんのものになる。こうして不公平のないようにしたのである。

イルカの食べ方は、肉は生で食べることもあったが、いくぶん臭みがあるので普通は一回湯がいてから汁を捨て、ネギといっしょに味噌煮とする。内蔵は湯がいてから湯を捨て小さく切り、醬油で煮て食べる。マメワタ(肺臓)がコリコリして一番美味しい。湯がいたものを干して保存しておき、湯に戻して食べる。ヒレを煮て食べることもあったが固かった。食べきれないものは売った。唐津の魚市場などに船に乘せて運んで行ったという。

### 3 近世の記録との対比

さきに紹介した『図考』の「海豚漁事」には近世におけるイルカ漁の様子が次のように描写されている。

一、漁人の江豚の群れを見付ると勢子船を出し沖よりそろそろとおどして己が浦らへ追ひよする也。浦近く成りたる時網にて二重三重に張り切り、夫より段々磯近くよせて取り揚る事大概図の如し。但しにうどう、はんどふ、はぜは寄よし。ねずみ、しらたごは早くして寄せにくし。

一、大きにうどうふ、はんどふは七尋位迄ある也。はぜも大概是に准ず。ねずみ、しらたごは又ちいさし。大がひ二尋内外なり。

一、魚の白身赤身臓腑開の事等大がひ鯨のごとし。

一、黒皮甚だ薄し、白皮は余ほど有り。油の方吉、尤油をとる事はにうどうふ、はんどふ斗なり。

一、赤身其外の所も皆食料也。少々匂ひあり。

一、はぜ、ねずみ、しらたごは食料斗也。皮付故価値し。

一、筋は丸切斗少々外の所は取らず。然し大白にはあらず。然れども鯨の筋といふかの筋は弦にしては見分けがたし、水に入れて見分能也。

一、油は鯨油の次なり、とより吉、減り強く油煙多し。  
一、口中は常に大魚と同じ、其他名所大概鯨のことし。

これに続いてイルカの種類ごとに説明がある。「にうどふ」は「んどふ」はともに頭が少し太い。両者の違いはわずかである。また「はぜ」「ねずみ」「しらたご」は口が少し細くて長い、わずかな違いである。なお「しらたご」は少し白みがかったいるとある。ハゼはマイルカのこらししい。現在でもさきにみたように「にゅうどうはんどう」と「しらたご」という呼称が聞けたが厳密な比定はできていない。

『図考』の内容は全般として現地で実際に見聞したことをもとにした記述とみてよい。注目すべき点は、現在はイルカから油をとったという伝承はないが、近世では灯火用に搾油されていたことである。イルカ油は鯨油につぐ品質であって点火しやすく持ちがいいが油煙が多いとされていた。また肉は当然食用とされるが、油をとらない小型イルカの場合は皮に脂肪層がついたままの部分が高く売れたことがわかる。

そして『図考』の名のとおりの様子を描いた絵が非常に詳細であり、聞き取りによる現代のイルカ漁とほとんど変わらない。その状況を、次のように読み取ることができる。

湾内に入ったイルカに対して、まず入江の口を三重に網で仕切る。そしてその内側にイルカを岸に引き寄せるための網（取り網）をかけて地引き網のように両側から引く。囲い込まれた

イルカに対しては海中に入った男たちがとりついて網をかけている。そして浜にあげられたイルカは長い包丁でもって解体されるが、なかには血の混じった噴気をあげているイルカも見られる。海岸でいくつかに分断された胴体は馬の背につけたり船に載せてどこかに運ばれている。なお囲い込まれた網の中から逃げだそうとするイルカに対しては、棒切れに網を付けたものを海中に投げ入れ投げ入れして脅しをかけている様子も見える。絵の端の方に羽織を着た人物が見えるのは、もしかしたら作者（悠々軒）と従者の姿かも知れない。そして興味深いことは、その近くにイルカ一頭まるごと網をつけて引っ張っている男がおり、それを棒をもって追いかけている様子が見えることである。同じく、右の方には左手に鎌を持ち、右手に肉片らしきものを持って逃げていく子どもがいる。これらには説明こそないが、いわゆるカンダラであろう。そして画面のいちばん端には女性を交えて宴を張っている姿もある。全体を通してまさに祝祭的な空間が現出しており、いくつもある捕鯨関係の図像とも共通する雰囲気である。

イルカ漁の場合は大規模な鯨組にみられるような専門集団による漁とは違って、地元の集落総出の共同作業であり、獲物も自主的な規定によって平等に配分された。しかも多くても年に数回という出来事であったから人々の興奮をいっそうかきたてたことであろう。

最後に断片的ではあるが周辺の伝承を紹介しておこう。

唐津湾に浮かぶ「高島」では港の口に、大敷網を張ってイルカを追い込んだ。現在八五、六歳の人が若い頃に見に行ったことがあるという。また捕鯨の基地として有名な小川島では、船

と並んで泳ぐイルカを上から銚で突いてとった。食べ方は皮と身は味噌・砂糖・ネギで煮る。内蔵は湯がいて食べた。ヒヤクヒロは鯨よりも美味しい。

## 二 五島列島のイルカ漁

九州の北西、東シナ海に浮かぶ五島列島は主島とされる福江島・久賀島・奈留島・若松島・中通島をはじめ合計一一八の島から成り立っている。島周辺の海域にはクジラやイルカが回遊する姿が多く見られ、数カ所で伝統的なイルカ漁が行われていた。その中から、三井楽、有川、魚目の三カ所の事例を紹介する。

### (一) 三井楽のイルカ漁

#### 1 三井楽の概況とイルカ虐殺報道について

長崎県南松浦郡三井楽町は福江島の北に突き出した三井楽半島にあり、半島先端部の柏は、古代の遣唐使船出帆の港であった。町役場は半島のつけ根東側の湾に面した浜の畔郷にあるが、この浜の畔郷の集落とその前面の海岸がイルカ追い込み漁の舞台である。この地の人びとが古くからイルカを食料としていたことは、弥生中期の三井楽貝塚出土遺物のうち海産類では、ブリ・イシダイ・エイ・サメなどとともにマイルカの骨が目立っていることから推測できる。

なお近世の柏は、有川湾、富江黒瀬沖と並ぶ五島捕鯨の基地であった。明和六年（一七六九）に藩が呼子（佐賀県呼子町）

から生島仁左衛門を招いて操業させたもので、この際に移住してきた一団はヨコウグンと呼ばれたという。近代になってからは極洋捕鯨・大洋・日水などが近くに基地を設けていて、南極に行かない間、キャッチャーボートだけをまわして沖で撃った鯨を荒川港などで解体していた。捕鯨を中止した最近ではクジラも増えたような気がするといわれ、出漁中に大きなイワシクジラが船のすぐ近くに寄ってきたので驚いたという漁師の話も聞かれる。イルカ漁を行ってきた地域がクジラとも関係を有しているという例である。昔はシャチも回遊してきたそうで、高崎の浜にシャチに追われたブリの死骸が何十もあがったというが近年その姿を見ることはない。

三井楽は水に恵まれていない。飲み水は湧水からポンプで汲みあげる。井戸は数少ないうえに渇水期にも枯れない井戸は決まっているので、日照りの時は順番で汲みにいった。天水でも間に合わなかった。たまたま調査時点でも水不足で島の中央部の台地状になったところにある水田の水が足りず、用水池から生コン車に水を汲んで運んでいた。農業は甘薯と麦を主とし、海ではスルメ用のマツイカ漁が中心だった。イルカは貴重な蛋白源ではあるが、時たまやってくるのを捕獲するだけだから、恒常的な生業には組み込まれていない。年に数回来れば多いほうであった。常食はイモあるいはカンコロ（干し芋）が主体であった。また浜に寄ってくるモ（ホンダワラ）を砂や牛糞と混ぜて芋の畝の肥料にするため、牛車をひいて浜に降り、早いものがちで拾い集めた。そんなときにイルカが寄っているのを発見することもあったという。

嶽野春次（大正二年生まれ）さんの場合、三月にサツマ（甘



図3 三井楽の湾 (5万分1地型図「三井楽」より)

薯)の苗床を作り、入梅前五月から六月初めに苗をさした。十月半ば頃から十一月にかけて収穫し、このあとで、麦蒔きをする。ただし、大きい家は芋用と麦用の畑がそれぞれあったので、芋を掘らないうちに出荷することもあった。麦用の畑には麦のあと大豆を作った。現在は十二月に出荷することが多い。秋口、サツマの収穫が終わると船を出して、マツイカをたくさんとった。農閑期の大切な現金収入になる。イカ釣はずっと前には松の根をかがり火のように焚いていたが、やがてカーバイトに代

わった。動力船はごく最近のことで、終戦後もしばらくは無動力船だったが、集魚燈を使った近代船がよそから来れば旧来の漁業はつぶれるおそれが生じた。旧来の半農半漁という中途半端なことではどちらも成り立たなくなつたので漁船の近代化を進めた。専業の漁師が出現するのもそれからで、次第に漁業の方に専業化してきた。玉の浦の黒瀬に萩の漁師が定置網を伝え、これが五島の定置網の始まりになったという。その当時はマグロ一〇〇斤が五円、一か月の給料が一二円だった。マグロはワタを出したあと、腐敗を遅らせるために海の深い所に沈めておいてから出荷した。

ミカンが色付く頃からマツイカがとれ始め、クリスマス前後が最盛期になる。十二月二十四日の夜を「イカの命日」といい、この夜に浜におりとイカが「キュツキュツ」と鳴きながらいっぱい来ているので、先を争って拾ったものだった。なお、「ブリの命日」という日が二月十一日の紀元節で、この日を境にある程度まとまった漁があるという。

ところで、一九九〇年、三井楽はまったく突然に世界中の注目を集めることになった。五百頭以上のイルカがまさにここで捕獲されたからである。同年一月四日付の各新聞は、イルカ三〇〇頭大量自殺(読売)、迷走イルカまた受難(毎日)、イルカ五八三頭死の上陸(朝日)などの見出しとともに、海岸に重なり合った多数のイルカの写真を掲載した。「頭殴り解体、食用に」(中日)というサブタイトルをつけた新聞もある。そして、翌五日付イギリスの各紙が、イルカ虐殺あるいは全世界の恥、と

いった見出しで大きく報道したというニュースが日本で報じられ、三井楽のイルカ騒動は国際問題にまで発展した。その後の展開も含めて国際的なイルカ観の違いについては別稿にゆずる。ひとつだけ本項に直接関わる点を指摘しておこう。この報道ではイルカ捕獲の主体は地元漁協であると印象付けるような内容が多かったが、じつは当地には海豚組合という、イルカ捕獲のための組織が存在しており、両者の構成員は重複するが全く別な組織である。報道のうちこのことに触れたものは少ない。『週刊文春』（一九九〇年一月一五号）の、「離島である五島列島は牛肉、豚肉の値段が高いこともあって、イルカを神の授かり物として食べる習慣がある。大切なタンパク源としてイルカの肉を分配する組織『イルカ組合』もある」と書いていた程度である。海豚組合は当時、実際には機能していなかったが、住民のイルカに対する対応はこの組織の一員であるということ抜きにしては考えられない。海豚組合の存在は、イルカ大量捕獲の背景に地元住民のイルカ食に対する強い嗜好があったということを示している。たとえばこんな印象を語る人もいた。「シオが引いてイルカがあがったのは午前十一時頃で、最初はオカズ程度かと思った。欲しければとりに来いといったら、よそから車でとりに来た。玉の浦、富江からも来たものだ」と。この大事件はマスコミの報道が思わぬ波紋を呼んだものであつて、昔から行ってきたイルカ漁がこんな具合に世の批判を浴びたことは、地元にとってはさぞ不本意なことであつたに違いない。

## 2 イルカの回遊と捕獲

三井楽ではイルカのことを「ユッカ」と呼ぶ。たとえば、ハズイッカ、ネズユッカなどという。ここの浜に来るイルカは、さきの虐殺報道の中心となったハナゴンドウのほかに、ネズミイルカ（別名ハシナガイルカ、これは美味しいという）、ゴンドウ（大型で三〇〇〜五〇〇キログラムもある）などである。これらのイルカは漁師にとっては大敵で、釣りなどをしていても、イルカが現れるとパタツと釣れなくなる。ここではスルメにするマツイカをとったが、イルカ一頭でも現れるとまったく駄目になってしまふ。柏出身の竹野正人さん（昭和八年生まれ）は、三井楽には一時、千頭ものイルカが来たこともあるという。三井楽湾の入口の中心部は二七、八メートルの深さがある。サンドゼまではイルカが来るがそこで警戒するようだ。一見よく似た砂浜であつても高浜、大濱にはまったく来ない。イルカがあるのは、白良浜（しらはま）から東隣の岐宿町（きしゆく）の打入の浜にかけてなので、イルカを捕獲するための組合は、三井楽と打折（うちおり）の住民で構成される。昔は網を使わずに船で追い込むだけであつたが、追われたイルカは自然と浜に上がったという。ときには何もしなくても浜に上がってしまうことがある。目の中に砂が入ってわからなくなるのかも知れないという人が多い。

また三井楽にだけイルカがやってくるのは、ここにイルカの神様があるので、参詣に来るのだと竹野さんは解釈している。また元漁業組合長の石原亨さんによると、ここにイルカがやってくるのは、海から見ると両側の山の間が低くなつていて、ちょうど海峡のように見え、通り抜けられると勘違いをするのではないかと言う。同じことは、沖縄県の名護湾でも聞かれた。イ

ルカがなぜ、決まった場所にやって来るのかは、いまだに大きな謎であり、それがイルカ参詣の伝承が生まれる背景の一つになっているのではないか。

三井楽ではイルカは季節を定めずやってくる。どこから来るのかその方角もわからないから、沖から来るとしか言い様がない。人間が追い込みをしなくても、朝見たらイルカが勝手に浜にあがっていたということもあった。イルカには明らかにリーダーがおり、そのリード次第でこの浜にあがるかが決まる。イルカを発見した人は大声で「イルカが来たぞ」と叫ぶ。誰いともなく互いに連絡を取り合い、船持ちは沖に、住民は必ず浜に出る。組合員であろうとなかろうと関係ない。群れを最初に発見した船は一番船（イチバンセン）といい、五番船まで（古くは三番まで）が報奨の対象になる。漁に関する役割のない者も浜に来て見物する。昔はイルカが来るとワアワア大騒ぎになってすぐわかった。イルカは浜に上がった時に涙を流すとか、子イルカは親と一緒に捕らえられるともいう。

捕獲したイルカは浜でさばく。解体にはイルカ包丁という大きな包丁を使用した。作業後は浜が臭かった。解体後の肉は集落ごとに分配する。頭は利用せずに浜に埋めた。肉は車に積んで各集落に持ち帰り、今度は各家庭に分配する。漁に使用した銚・船・包丁などの分は集落内でまた別々に配当が貰える。その比率は集落ごとに配置されている役員が決める。男手が出なかった家や後家さんにもわけた。家の人数には関係なく均等である。各家では自家で食べるほかに親戚に配ったりする。イルカを食べる習慣は三井楽だけではなく周辺にもあったので三井楽にイルカがあがったと聞くと、他の集落から親類のツテなど

を頼ってわけてもらいにくる。上五島から貰いに来ることもあった。子どもの頃はイルカの捕獲場所から離れている柏にいた竹野さんも、イルカが捕れたと聞いて、ここまで貰いに来たことがあった。

### 3 イルカ漁の組織

#### ① 海豚組合の構成

イルカを組織的に捕獲し、平等に分配するために一般の漁業組合とは別組織で「海豚組合」が結成されていた。昭和以降の記録しかないが、その時に決められた内容は三井楽における古来の慣習をもとにしたものと思われる。元来、この海豚組合は郷民なら誰でも入会できた。しかし、石原亨さんが漁業組合長だった昭和二十四年、漁業法が改正され、従来磯のものはすべて郷民すなわち浜辺の住民に捕採する権利があったのが、海は漁民のものだということになった。そこで漁民の権益は漁民で守るという前提で、海豚組合の会員も漁民に限るべきだということになった。その後、昭和五十年（一九七五）、組合員中の死亡者も増えたので、古い組合をいったん解散して整理したうえ新組合を発足させ、再び希望者を入れることにした。たとえばその時から会計として参加し、間もなく組合長になって、一九九三年九月までの二一年間組合を指導した鶴田房吉さん（大正三年生まれ）は玉の浦出身の齒科技工士で海産物問屋の経営者でもある。出資金は平等で、組合が網・錨・倉庫などを保有する。網は三井楽にあるだけでも長さ数千メートルもあり、岐宿にも半分置いている。この新組合は現在は休止中である。

最初に海豚組合を組織することになる集落を確認しておこ

う。本稿末尾に資料として全文を掲載した「海豚組合規約」第三にその規定があり、現在の三井楽町浜の畔郷と隣町の岐宿町打折及び小倉とされている。浜の畔郷はその中心部が三井楽の浜に面していて、いちばん北側にあって湾の入口を扼する位置にある後網から順に南に向かい八ノ川、正山、釜、里と並んでいる。昭和二十五年における世帯数は合計で八七六、人口は四三三一だが、六〇年になると世帯数一〇〇四、人口は二九〇二と大きく変化している。なお後網集落は明治以降にカトリック信徒が移住して開いた所で農業が主体であった。

また岐宿町打折は浜の畔と隣接しているが、小倉はその打折とは畔をはさんだ反対側にあつて地形的には参加している理由がわかりにくい。人数も少数であるので打折との特別な関係があつてのことかもしれない。

発足時における海豚組合の構成員は表1のとおりである。一戸一株ということで、株数では六つの集落のうち里郷と釜郷で六割以上を占めているが、船の数では半分以上を正山と八ノ川郷が保有していることになる。網の持ち分が不明だが、集落がそれぞれの特色を生かして参加していることが読みとれよう。また注目すべきは組合発足後になって青年が集団で参加していることである。具体的には里郷では昭和十四年に一〇株加入し、同十八年には三〇株になつてゐる。十八年段階では、その他に釜が二〇株、正山が一七株、小倉が三株、その後の二十年に八ノ川が二〇株加入している。戸主ではない青年個人としては組合員になれないが、漁の現場でもっとも活躍するのは青年たちであるから、集団で一定の株をもつことによって漁の収益の配分を受けることになつたのであろう。それは青年の活動費にあ

てられたとみられる。

また組合員数の変遷を見ると、昭和十七年あたりから急増していることがわかる。これは戦争の激化にもなつて食料不足が次第に厳しさをますなかで、従来直接関わつてこなかった人々までもイルカ肉を求め始めたと解釈できるのではない。また物価上昇とも関係するが組合加入金も発足時は一円であつたのが年を追つて値上がりしてゐる。十二年には二円となり毎年漸増しながら十五年には三円台になり二〇年の正月には五円となつてゐる。なお戦後の二十一年には一〇〇円、二十二年には一〇〇円であるが、加入者合計は一〇〇〇人を超えている。別に昭和五十年一月にまとめられた「海豚組合員名簿」がある。この組合は先に触れたように旧来の組合

表1 昭和11年発足時における海豚組合の構成員

集 落 名	総代数(うち船持)	組 合 員 数	船数(③実数)	昭和18年組合員数
里 郷	10 (1)	175	11 (14)	274
釜 郷	8 (1)	②176	20 (24)	233
正 山 郷	9 (1)	79	28 (39)	117
八 ノ 川 郷	9 (1)	82	33 (46)	91
打 折 郷	4 (1)	20	12 (12)	27
小 倉 郷	1 (0)	7	4 ( 4)	10
計	①41 (5)	539	108 (139)	752

注①組合員数のみで、非組合員の顧問1名を加えて合計42名とされる

②実名が記載されているのは152名である

③氏名の上に「船」と注記あるものの合計。ただし加筆の可能性がある(「昭和11年海豚組合規約」より作成)

表3 海豚組合加入金の変遷

年次	金額	
昭和11年	1円	
12	2	新加入者として
13	2.50	女性・出稼2円25銭
14	2.75	
同5月	2.35	2月85銭の者あり
15	3.45	
16	3.13	
17	3.50	
20	5	
21	10	
22	100	

「昭和11年海豚組合規約」より作成

まず第一条では、この組合の目的を「南松浦郡三井楽村浜ノ畔湾内及岐宿村字打折地先ニ游魚ス

#### 組織と加入者

②海豚組合の規約  
昭和十一年(一九三六)の「海豚組合規約」によつて、組織の概要を見ておこう。この段階ではイルカ漁にかかわる権利はいわゆる郷民すべてに開放されていた。

をいったん解散し、あらためて編成したもので出資金は各五〇〇円であったというが、この名簿によると構成員は三井楽町内だけで、里(二〇四戸)、釜(一七九戸)、正山(八九戸)、八ノ川(五八戸)、後網(五六戸)で合計五八六戸となっている。岐宿に属した打折と小倉は含まれていない。

表2 組合員数の変遷

年代	組合員数	加入金(円)
昭和11年	539	539
14年	627	762.35
17年	718	1,082.29
18年	752	2,201.19
20年	853	1,740.48
21年	923	2,630.48
22年	1,063	17,530.48

「昭和11年海豚組合規約」より作成

ル海豚(鼠海豚ヲモ含ム)ヲ漁獲スル目的ヲ以テ本規約ヲ設ク」と定め、第三条においてその加入権を有する者は「浜ノ畔郷及岐宿村字打折、小倉住民トス」とする。これは、先に述べたように、イルカが来る浜が限られているからで、該当する地区の住民のみが組合員たる資格をもつことができた。

この加入権は「株」と呼ばれ、第四条で「加入権トシテ壱戸ヲ壱株」とすること、「譲渡スルトキハ家督相続人ニ限ル」と、また「新規及分家加入ニヨル場合ハ金壱円以上ト定ム 但分家セザル場合ハソノ効力ナシ」と定めた。つまり正式な分家以外は加入を認めないというのである。

そして、昭和十四年正月五日(二月廿三日)総会において第二十六条「分家新加入者ニ対シテハ加入金貳円トシ、其年ノ基金割当額ヲモツテ加入スルコト」、第廿七条「寄留者ニシテ同組合ヘ加入セントスル場合ハ加入金貳円五拾銭トシ其年ノ基金割当額ヲモツテ加入スベキモノトス」の二条が追加された。分家の加入金の値上げと、村外からの寄留者も希望があれば加入できると改められたのである。

次に、組合の役職は第五条において、顧問・組合長・副組合長各一名の他に海豚総代と各郷役員が組合役員とされ、かれらの報酬は揚げ高の五分だけとされた。またイルカ捕獲作業中には所定の色の腕章を着用することが義務づけられていた。

#### 漁獲方法

捕獲の具体的方法は、第三十条以下に規定されている。「海豚ハセコヲツクリモヤヲ取り銚一切ヲ入レズシテ陸上ニ追イ上ルコト(但シ二回トシ以後役員協議ニ付ス)。また「船員ニシテ銚等一ヲモツテツイタ際ニハ一ケ年間ノ一切ノ権利ヲ中止スルモ

ノトス」とある。セコをつくりモヤを取り鉾一切をいれずして陸上に追い上げるということを具体的に見ると、モヤをとるといのは、追い込みにかかる船が互いにもやい綱を用いて一線を形成し、しかも追い込み中は鉾などの刺突具の使用は厳禁ということである。追い込み中の混乱を防止するためであろう。

また第十八条では「捕獲ニハ絶対発動船ノ操漁ヲ禁ス、但石原吉之助氏ノ所有スル発動船ハ監視船トシテ操漁ヲ認ム、監視船ノ報酬ハ役員協議ニヨルコト」とある。そして、頃合いを見計らって群れの沖側に長い綱を入れてイルカを囲い込み、次第にイルカを浜の方に引き寄せていく。この綱は長さ数千メートルに及ぶ主廻網で、これをあとで干して格納するまでの仕事は各郷一年交代とし、必要な人員は三十人と定められた。

網を張る場所は、岐宿のカサンナ（かさの浦）と三井楽漁港防波堤の突端。網を張る作業は出てきた仲間をひきつれて行う。昔は赤い旗をたてて組合長が指揮をとった。イルカを浜に追い込んだら、海に飛び込みイルカの頭を浜にむけて押すようにするとイルカは抵抗せずにおとなしく人間に従うという。

### 獲物の配分

漁獲物は厳密に頭数を数えた上で現物で配分される。漁獲高の二割は参加者でとり、残りの六割が組合員、四割が実際に出現した船の持ち主に配分される。

ここで特筆されるのは、イルカを捕獲したものに対する報奨として、オバケ（尾の付近）とタテガラ（背びれ）が与えられることになっている点である。この部分は後述するようにスライスして醬油をかけて食べたり保存しておくこともできた。その配分は次のように決められている。

## 第二十二条 捕獲シタル海豚ハ船ニテ運ブコト

但シ立ガラハ船ニ与へ、尾バケハ捕獲者へ与ヘルコト

## 第卅二条

陸上捕獲者ニ対シテハ二割ノ報酬ヲ与ヘ尾バケ及ビ立ガラヲ与ヘルコト

但シ船持チニ対シテ其内ノ一割ト立ガラヲ分与スベキモノトス

海上で捕獲した場合、直接捕獲した人にはオバケを、そのイルカを運んだ船にはタテガラを与えるという。また、浜でイルカを捕獲した者にはオバケとタテガラの方分が与えられ、船主にはイルカの一割とタテガラが分与された。タテガラはイルカの象徴であり、捕獲者にはその名誉が与えられたということになる。タテガラは軒先に吊るして乾燥させるから、その家の人間がイルカを捕ったということを誇示しているようにも見える。

またイルカ群発見者への報酬は、一番船から三番船までだが、割合の規定はない。イルカの肉を勝手に切り取ってしまう者もいた（北九州一帯で、これをカンダラと称するが、三井楽では明確に聞けなかった）。

### 聞き取りによる状況

以下は規定にはない実際的な行動の聞き取りである。網を張って追い込むようになったのは近年になってからで、沖でハツドウ（発動機船）のへりをたたいて海豚を脅して追った。沖に逃げようとするイルカに対してだけ鉆を投げた。イルカ用の鉆は必ず持参するもので棹は二尋くらいで先端は二段になっていて爪がついている。先はよく研いであった。鉆は突いている

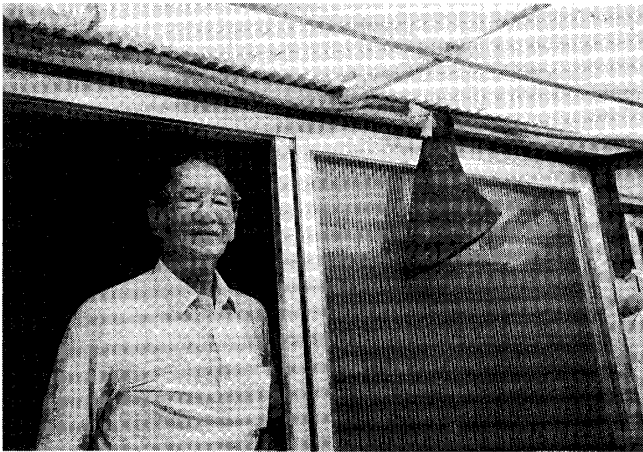


図4 軒先に吊したタテガラ  
(長崎県南松浦郡三井楽町浜の畔郷、1944年7月撮影)

解体は以前は海岸で行ったが、海上保安庁から海岸で血を流さないようにとの指導があったので、今はクレーンで吊り上げてトラックに載せオカに運んで解体する。各集落には駐在員が一人ずついるので、この人にイルカを渡す。駐在員とは役場との連絡をする役で海豚組合とは特に関係ない人である。集落内で慣行にしたがって肉を配分する。組合員には平等である。その肉は自家消費あるいは親戚にまわす。商品となるのは、報酬として貰ったもので、業者が買いに来る。業者は地区にいる魚屋がほとんどで買った肉を売ってまわる。以前は有害獣駆除ということ、千円の補助が県から

うちに曲がつてしまい、そこを金槌でいくら叩いても直らないが、不思議なことにイルカの背で叩くと曲がりがおつた。銚はこの村にいた鍛冶屋に作ってもらったが、この鍛冶屋は今もうやっていない。イルカ漁の時は必ずこの銚を持っていく。夏場にはイルカの追い込みはしない。夏はすぐに腐ってしまうからで、冬場なら喜んでとる。

出たが、例の事件以来打ち切られた。

イルカの群れの第一発見者は一番船といい、以下順次五番船までが、あとでイルカを特別に配分される(規約では三番船までとある)。あとは出た船に平等に分けた。以前はみなこの組織に入り金も積み立てていたが、イルカ捕獲についての批判が高まってからは、各集落に肉を配当することもせず、希望者に貰ってもらうだけになった。事件以後もイルカが上がり、肉をわけたこともあるし魚屋で売ったこともある(ここで捕獲されたものではないが、三井楽のスーパーではイルカ肉のパックを百グラムあたり一五〇円で売っていた)。かつては沖でイルカを見ると船に積んである銚で突いてしまうこともあったが、イルカ捕獲の批判が強いたので、自分が沖で突いているという話は、したがらない人が多い。こういう時、一匹や二匹突いて持ちかえつても皆欲しがるので配分がむずかしく、下手にわけると仇(あだ)を作(恨まれる)。三井楽では中年以上の人で海豚を食わない人はない。

#### 4 イルカの食べ方

頭の大いニュードイルカよりもネズミイルカの方が美味しい。生の肉はいったんイルカの脂身でいためてから水炊きをし(湯で煮る)、次に人参・牛蒡などの野菜を入れて醤油味で炊いた。生姜やニンニクも入れる。あるいは、まず湯がいてからきれいに洗い、コンニャクなども入れてすきやき風にするとうまい。

これは新しい食べ方だが、新鮮なものに軽く塩を振り、バターをたっぷり加えてステーキにする。普通はイルカ肉を食べる時

は水炊をするが、ステーキの場合はその必要はない。ネズミイルカの「やわい」やつは特に美味い。好きな人はアカミを刺身にすることもある。心臓を塩水で洗ってそのままかぶりついて食べる人もいた。内臓のうち「ヒヤツピロ腸」は食べた。マメワタがうまいという。イルカの肉を食うとヌクマル（温まる）という。夜中にシヨンベンに起きなくてもよい。とくに女性に温まるといわれている。

皮に脂肪がついたままのものを「カワ」というが、これは刺身のように薄く切って熱湯をかけ、醤油で食べる。なおカワは、家の土台石と柱との間に置くと木材が腐らないという（この伝承は沖縄県の名護市や五島の有川でも聞かれる）。

イルカの背鰭（せびれ）はタテガラといい、これを切り取って紐をつけて家の軒下に吊るしておく。何年でも吊るしておいて、カチンカチンに固くなったものはカンナで削って湯をかけて食べる。酒の肴に適している。タテガラは漁の時に功績のあった人に対する報奨品に使った。イルカが寄ると、各集落に対して「みんな寄って来いよ」と声がかかるので浜に出ると、もうタテガラは分けられたあとだった。タテガラを軒下に吊るす習慣は近年までよく見られた。ユデカンコロを作る前に切った芋を吊るすために垂木に釘を打ってあったが、その釘を利用して、タテガラやカワ（脂身付き）を吊るした。タテガラはとった日にはすぐに湯がいて食べたものである。鶴田房吉さん（大正三年生まれ）の家にはまだタテガラが保存されていたが、ビニールに包んで天井裏に上げてあったのですっかり黴びていた。タテガラを吊るす風景は、現在ではほとんど見られなくなった。三井楽では捕った魚を次のような方法で保存して適宜食用と

する。たとえば、正月には塩漬けにしたブリ・イワシなどを丸太に太い縄で掛けた。これをおろして正月の御馳走にする。ブリは冬なら二、三か月間、軒下の風通しのよいところに吊るしておけば長期にわたって食べられた。人によってはこの方が美味いという。シビと呼ばれたホンマグロは一本が四、五キロの時はまだ小さい子であり、五、六キロの時にコマグロという。「シビの四十九日」といって、樽の中に米糠を入れた中にシビを保存しておくといふ四十九日もつたという。あるいはシビに塩をふり、藁のコモで包んでしつかりと巻くといふまでも保存できた。

五、六〇年前までやっていた。イワシは浜に貰いに行き、塩にして樽詰めしておく。イルカは、桶屋に注文して長径が一メートル前後の楕円形に作らせたイオバチに、肉を漬けこんだ。あるいは、イルカのアカミ肉を四斗樽に入れ塩をして一晩置いてから軒下に吊るしカチンカチンにして保存した。焼いてお茶請けにくださった。焼いてすぐに金槌で叩いてほぐし、食べやすくする。片手に芋、片手にこれを焼いたものを持って食べたものだった。なお、ユルカを味噌漬けにすると、上に油が浮いてきてドロドロになる。四斗樽一杯作った。

三井楽ではフカの油を田にまいたことはあるが、イルカの油をとることはなかった。当時はイワシなども大量にとれたが、これを買って食べることはなかなか出来なかったもので、ただで入手できるイルカの肉は貴重な蛋白源だった。昔は物々交換で、イルカの肉を背負って米と交換に行った。行く先は隣の岐宿町の方で、漁があつてから二、三日は、そろそろ行き来をしたものだった。ムラも町も総出で浜は大賑わいだった。

## 5 イルカ供養碑

三井楽には二基のイルカ供養碑がある。一基は、地元の人が小岳と呼んでいる山の先端部、イルカ漁が行われる白良浜を見下ろす位置である。正面に、「海豚累代之墓」、右側面に「発起者 海豚組合会長・柏戸佐太郎、平川徳三郎、永原善吉、吉川甚助」の四名列記。左側面は「昭和二十四年五月五日建立」とある。石碑の高さは、六五センチ、三段の石の上に置かれている。祭日はきまっていないが、そこで御神酒を飲む程度。初めは神主を頼んでいたが、のちに坊さんを頼むようになった。お礼には組合から神饌として寄附されたブリ二本のうち一本を進呈する。建立のきっかけは、イルカは動物だから供養してやろうということだった。

もう一基は、湾内の弁天様を祀った小さな島の上にある。この小島には以前は大きな松が生えていたが、松食虫によって枯れてしまった。古くは六畳ほどの大きさの建物があったそうだが、今は石の祠が剥き出しで、その中には文字もない石が一本入っているだけであった。また、元来は満潮の時には歩いて渡ることができなかつたというが、現在はいつでも歩いて渡ることができる。周辺の海岸は生活排水で汚れていて異臭が漂っていた。イルカ供養碑は弁天様の石祠より少し低い位置にある自然石で、地元の人からは「イルカガミサン」と呼ばれている。正面にのみ刻字があり「昭和十一年旧十月十六日建立 海豚神」とある。一九九〇年の海豚騒動の時に雑誌などに紹介された写真はこの碑をさす。石碑の頂部は尖っているが、全体の高さは一二〇センチ、最大幅は六七センチであった。この石碑の傍らにイルカの頭蓋骨（最大長四四センチほど）が一つ置かれていた。

とくにここに奉納するような習慣があるわけではないというが、供養の意味が潜在的にあるのかもしれない。なお、この石碑はことさらに祭ることもないという。

ただひとつだけ注目すべき伝承があった。それは先にも触れたが、イルカはこの石碑を参詣に来るのだという話である。ただし、これは昭和生まれの方が一人だけ伝えている話で、彼よりも年長の人の間では聞くことができなかった。一応保留としておく。イルカの供養には、漁のあとで役員が集まり飲み食いをしたという程度で、今は全く行われていない。

なお、この二つの石碑がなぜ、紀年の年に建立されたかについては、すでに不明となっているが、伊豆の例でいえば、大漁があった年とか、海豚組合に何らかの画期があった年などに建立されているので、おそらくそれに類したことが契機となったのであろう。



図5 海豚神  
(長崎県南松浦郡三井楽町  
浜の畔郷、1994年7月撮影)

## (二) 有川・魚目のイルカ漁

### 1 青方文書にみるイルカ漁

福江港から五島列島の北部に位置する中通島の郷の首をめざす若松フェリーは途中で海豚鼻と称する地点を通過する。横から見ると、長いくちばしと丸い頭が本当にイルカそっくりである。同乗の年配女性の話では自分が生まれた若松にはイルカを食べる習慣はなく、イルカを捕ることもないという。ただし学校に通っていた時代、海をイルカがはねる姿は見たそうで「ユーカーがとぶと雨になる」といわれていることであつた。

中通島の北側から、さらに北に向かつてまっすぐに延びた半島がある。このつけ根には、西側に青方湾、東側に有川湾が食い込んでいて、半島は幅わずか一キロほどの土地で辛うじてつながっている。この東西の湾のうち、とくに青方湾一帯は中世の豪族青方氏の支配下にあつた。同家伝存の青方文書<sup>①</sup>には中世の漁労関係史料が含まれていることで知られ、組織的なイルカ漁に関するものとも古い記録もその中に見られる。

ちなみに青方氏は京の清原氏の流れを汲み、その一族は所領の一部である小値賀島や中通島に住んでいた。しかし清原氏は包の時に事情があつて本領を取り上げられ、その後にはこのあたりに勢力を構えていた松浦氏が入つた。そこで当時小値賀島に来ていた、是包の甥にあたる藤原尋覚悟が松浦氏と争い、建久七年(一一九六)に鎌倉幕府の裁定によって地頭職に補せられた。その後、松浦氏の勢力に抗しがたく小値賀島を出て青方に住み、以後青方を名乗るようになる。その後宇久氏の隆盛にともない青方氏は宇久氏の勢力下に組み込まれる。

青方文書は同家にかかわる諸権利の確認のため、ある時期に関係書類を集めたと考えられるが、その権利の重要部分をなすのが、この海域に回遊してくるマグロ、ヒオ、イルカなどを狙った建網設置に関わるものである。耕地が乏しいかわりに海流や複雑な海岸線の関係で豊かな海の幸に恵まれたこの地域で、漁労が豪族の重要な収入源になっていたことをうかがわせ、同時にその背景としての漁業組織や漁の技術などについても、記録の乏しい中世の漁業の実態を示す貴重な資料となっている。ここに登場するイルカ網は、わが国におけるイルカの組織的捕獲に関する最初の記録といつてよい。永和三年(一二七七)のことである(『青方文書第二』三三一号)。

#### 青方重置文案

かつをあみ、しひあみ、ゆるかあみ、ちからあらハせうせうハ人をもかり候いて、しいたしてちきようすへし、

ゑいわ三年三月十七日

漢字を宛てれば「鰹網、鮪網、海豚網、力あらば少々は人をも駆り候ひて、仕出して知行すべし」となるう。

当主、青方重が子孫に残した置文において、鰹・鮪・海豚を狙った網について、もし力があるなら人足を駆り出しても精出して管理運営すべきである、といった意味となる。この文言から、建切網を仕掛けてこれらの回遊魚を捕獲していたことが推察されるし、それからの収入が青方家にとって大きな比重をもっていたことがうかがわれる。

この文書など青方文書にみられる五島の中世漁業の様相につ

いて羽原又吉は、網漁（曳網・敷網類）と釣漁が中心で漁場は多少は湾外の沖合に向かつてても出漁する機運が見られるが、生産機構上では「僅かに網代の徳分関係や知行乃至護状等から見て、手近な優良な漁場は知行主が直営し、従って漁船・漁具の如き生産用具は素よりのこと労働力の大部分は凡そ自ら準備したことゝ思われるが、なお金があれば、前文書（注・引用文）に見た如く『ちからあらハせうせうハ人をもかり候いて』自営の拡張をも計画したことゝ思われる<sup>(1)</sup>」と述べている。

青方文書にイルカ漁に関する文言はこれ以降出てこないが、おそらくは前例にならつてこの漁は継続されていたとみられる。

## 2 有川湾におけるイルカ漁の記録

青方湾においては青方文書の存在によつて網代の漁の盛んであったことが知られるのだが、青方湾の反対側（東側）にある有川湾に関しては中世の漁業に関する資料は全くない。しかし魚族の回遊という点から比較すると、黒潮に乗って北上してきたイルカ、シビ、カツオなど暖流性の獲物が南西に逆流する沿岸流とともに湾内深く入ってくるという点で、半島の反対側に位置し東北に向いて開いた有川湾のほうがはるかに地の利を得ている。この点からみて、青方での漁が中世までさかのぼれるならば、この有川湾においても少なくともその時期には同様な漁が行われていたと見る事ができるし、むしろ、青方よりも発達が早かったと推定することもじゅうぶん可能である<sup>(2)</sup>。事実、近世に入ると有川湾におけるイルカ漁に関する記録が頻出する。それは、この湾の西岸に位置する魚目と対岸の有川とが、異なつた支配におかれるようになったために確執が生じて長年

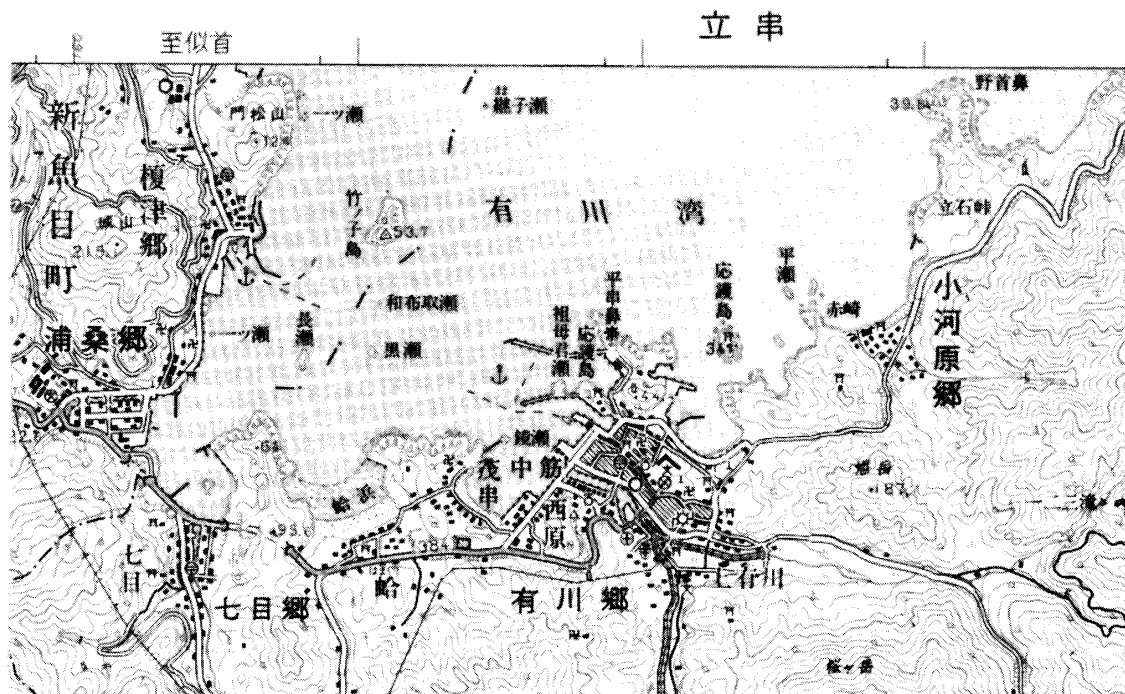


図6 有川湾（5万分1地型図「有川」より）

にわたる訴訟がひきおこされ、その過程で作成された文書の中にイルカ漁がしばしば登場するからである。これはイルカ漁が他の魚を対象とする漁とともに住民の生活に関わるほどの比重をもっていたことを示している。

有川湾は東岸に有川、西岸に魚目という二つの地区が向かい合っている。そのうち魚目はカトク（家徳）と呼ばれる一五の網元が力をもち、その下で伝統的に漁業を重視していたのに対し、有川は農業主体であった。とはいえ、集落の前面が海であるから有川にしてもある程度の漁業は行われており長年の慣習として互いの権利は定着していた。ところが有川と魚目が突然別の領主の支配下に置かれることになったため、漁業の権利をめぐって両者の間に深刻な対立が起きることになった。

さきの青方氏の主筋となった宇久氏は秀吉の朝鮮出兵に加わった文祿元年（一五九二）、姓を五島に改め江戸時代には五島における支配を確立した。石高はわずかに一万五千石余りであったが、明暦元年（一六五五）、うち三千石を割いて富江領を分知した。残りの大部分は富江領と呼ばれる。五島氏の支配下ではいくつかの村を合わせた支配単位を「掛Ⅱかけ」というが、この分知によって、魚目は富江領、有川は富江領となったのである。有川湾に面する二つの掛は、湾内の境界線をはさんでさまざまに利害を対立させることになってしまった。当時、有川は地方、魚目は浜方とされており、それぞれ生業の基盤は異なっていたが、ともに海に面していることから、魚目だけが海域を独占してきたわけではなかった。しかし、これを契機に従来の暗黙の慣習が否定され、有川は漁労に関する権利をすべて失うことになってしまった。そこで有川湾内における漁業権を認

めるよう幕府に訴え出た。イルカはマグロなどとともに主要な漁獲対象であったために、その際作成された関連文書によって有川湾におけるイルカ漁の具体的様相を知ることができるのである。

次は有川側から出された、問題の海域は共同の漁場であったとの主張に対する魚目側の反論である。

・ 先年より孫次郎様（初代富江藩主の兄）御世迄もこのあんじゅう島江豚追番の御侍、足輕衆差越し置かれ、江豚来り候えば小船に乗り、船ばたをたたき、網を張り浦内へ段々追入れ申し候。今以って武助殿（富江藩二代目藩主）方にて差越置かれ候

・ 昔より江豚此浦口あんじゅう島辺へ見え候時、小船共出し、追い入れ、鮪取縄網十五帖共、皆出合い網を続き合せ候えば、四千五百尋御座候を以て、此の浦口を張り切り江豚獵仕来り候

これによれば、十七世紀後半には船ばたを叩いてイルカを追いかみ、長さ四千五百尋にも及ぶ網で退路を絶つての大規模な追い込み漁が行われていたことがわかる。しかも、「あんじゅう島江豚追番の御侍」とは、湾内の安中島に見張り所が設置され、富江藩から派遣された武士・足輕が監督していたことを示している。この監督者は対馬藩に見られた「海豚奉行」のように、水揚げを監視し一定の上納を命ずる役割を担っていたのである。なお、網十五帖は、さきの家徳一五人と関係している。

その後、延宝六年（一六七八）、富江藩は大村の町人、深沢儀太夫勝幸に魚目浦の鯨漁を許可し、儀太夫は請浦、すなわちこの海域における捕鯨の権利を独占するかわりに、富江藩に運上

銀を納入することになった。この時の漁法は「江豚網を芋網に仕直し、江豚・鯨を取」というもので、藁網を強い芋網に仕立て直し、それを有川の山の木に繋いで敷網とし、鯨を追いつんで突き取る」ものであったとされる<sup>15</sup>。ちなみに深沢儀太夫は貞享元年（一六八四）に網掛式突取捕鯨を彦岐・勝本浦に導入した人物で、十七世紀の後半から十八世紀初頭にかけて本人および娘婿（与五郎）二代にわたって大いに栄えた<sup>16</sup>とされる。しかしこれでは有川に利益は全くないうえに、目の前で鯨が捕獲されるのを手をこまねいて見ていることになる。そこで有川ではすでに宇久島で捕鯨を実施していた山田茂兵衛を組頭とするあらたな鯨組を編成し、網取り法による捕鯨を開始した。

捕鯨が盛んになることで地元の経済は活性化し各地から多くの出稼ぎ漁夫が集まった。有川代官所はこうした漁業活動に対してさまざまな口銭を徴収した。享保六年（一七二一）の「鮪海豚口銭定事」によれば、「鮪入鹿取揚候節網主自分之船水夫二而積登候者口銭差免候事」とするが、「運賃船二而鮪海豚積出候節」と「鮪江豚網主方より地下旅商人二売渡候節」には、それぞれ運賃船の船頭ないし買主の商人から「銀高二七分之口銭」を納めるべしとある<sup>16</sup>。漁業からの収入が藩財政をささえる柱の一つになっており、同時にそうした負担にたえるだけの利益を網主や流通業界が得ていたことが判明する。

### 3 捕鯨とイルカ漁

さて、この地域にかぎらずイルカ漁と捕鯨とはつねに深い関わりをもっている。もちろん、本稿冒頭で触れたように、イルカと鯨とは動物学的には同じ分類に属している。そもそも日本

における捕鯨方法は、流れ鯨・寄り鯨など自然に海岸に打ち上げられたものを利用することを除くと、次のように変遷してきたと理解されている<sup>17</sup>。すなわち、①弓取法（弓を射て仕留める。アイヌの行っていた毒矢の利用が想定される）、②突取法（鉤専用）、元亀・慶長年間から延宝期までで、初めて捕鯨業が成立、③網取法（網でからめ鉤で仕留める、延宝期から明治初期。いわゆる古式捕鯨）、④ボンブランズ砲併用、⑤ノルウェー式捕鯨砲（明治三十年代から近代）。

このうち、日本独特の方法が③の網取法であり、その発明時期や創始者は必ずしも明確ではない。だが、有川湾で行われていたイルカ網がこの方法の直接のヒントになったのではないかと考え方も示されている。西村次彦によれば、さきの深沢儀太夫勝幸は紀州熊野（あるいは長門の通浦）で網を使ってクジラを捕っているのを見て網取法を考案し、同じ地形である魚目之浦で鯨組を始めて成功、鯨長者といわれたのだが、「鯨取りには掛網と敷網を用いるが、敷網については、魚目では以前から海豚網を用いて鯨をとっていたので、網取り法というのも案外魚目の方法が基礎となり、それが更に各地の経験を取り入れて、完成したものではないか」と述べている<sup>18</sup>。おそらくその根拠になったのが、魚目と有川との争いのなかで作成された文書の一部に含まれる文言で、深沢組が捕鯨を始めた年以前の状況として、「江豚網にて鯨も取り候処に、佐渡守政藏御家老と、又有川より何彼と違乱申しかけ、江豚網にて鯨取り申候儀相滞候得共<sup>19</sup>」という内容である。これにより、海豚網で鯨をとることが行われていたことがわかる。おそらく湾内に来た鯨を江豚網で囲み鉤をうって仕留めたのだろうが、それはまさに網捕り法

の先駆的形態といえるのではないかと推定するのである。

この考えに対しては、「有川における海豚網は湾入を利用した断切網を伴う追い込み漁であり、たとえ同様の方法で鯨を捕獲した事があつたとしても、この方法が沖で網を掛けて舐て突く、一般的な網掛式突取に発展し各地に伝播したとは考え難い」という批判がある<sup>(20)</sup>。

両者の見解の相違は簡単には埋めがたい。しかし筆者は鯨と海豚の区分が多分に便宜的なものである以上、たとえどのような漁法によるにせよ、イルカ漁の延長線上に捕鯨があるというように考えている。したがって、この有川湾における網漁が網取捕鯨法に直接つながったとか、ある特定の人物が網取捕鯨を開発したと断言することはできないが、網取捕鯨の発明にイルカ網が大きなヒントになっていると考えたほうが自然ではないだろうか。

有川湾においては前記の文献でも明らかなように、同一場所では捕鯨とイルカ漁とが混在していた。有川には山頂で鯨を見張ったという鯨見山があり、鯨供養碑がたつ。頂上からは有川の町が一望できる。この下に入江をはさんで海童神社がある。海童神社は鯨の巨大なアゴの骨で鳥居を作つてあるので有名な神社で、正月にはここで鯨踊りが奉納される<sup>(21)</sup>。巨大な経営体としての側面をもち莫大な利益を生んだ捕鯨については漁業史・経済史などの観点からの膨大な研究があり、有川の事例については『有川町郷土誌』<sup>(22)</sup>に詳しい。本稿ではイルカ漁にしばって問題を追究することにするが、有川湾におけるイルカ漁は継続されつつも次第に重要性を失っていくのである。その理由はマグロを対象とする新型の大敷網が長門湯玉から導入されたため

である。魚目には五島としては二番目になるが、享保九年（一七二四）に敷き入れられたのが最初で、カトクのもとに一五帖の網は次々に大敷網に切り替えられていき、全てマグロ網として用いられることでマグロの捕獲は飛躍的に増大し、漁村魚目の黄金時代を築くことになった<sup>(23)</sup>。このような事情から近世中期にいたってイルカ漁は主たる漁業としての地位を失つたとみてよいだろう。

#### 4 明治初期から昭和戦前期までのイルカ漁の実態

有川漁協が所蔵する綴りの中に明治三十八年に作成された「鰻漁業二関スル契約書」がある。維新以後も近世以来の慣行によつて行われてきた日本の漁業は明治三十四年にいわゆる「明治旧漁業法」が公布されたことで、旧来の漁場占有権が形式的にいったん消滅し、あらためて明治政府の免許によつて発生することになった。しかし内容としては旧慣が尊重されるものであつた。この契約書はそうした政策に応じて作成されたものであるから以下の内容はおそらく近世以来の慣行を踏襲していると考えてよいだろう。それはイルカ追い込み漁を行うにあたり、有川郷が中心となつて漁獲物の分配法や経費の負担方法を定めたもので、当時の有川村のうちの有川郷・魚目村・北魚目村の三ヶ郷が相互に交わした契約書である（本稿末尾の資料参照）。それによると、総頭数を共有高とし、次の必要経費を控除する。①旧五島藩主へ献納鰻壺頭、②神仏奉納鰻慣例二依ル、③追込精励料（内容は慣例による）、④網の損料などは共有高の二〇パーセントとする。これらを除いた残りを次のように配分する。すなわち有川郷が六八パーセント、上高崎が一二パーセ

ント、残る二〇パーセントが七目、小河原、赤尾、友住、江ノ浜、頭ヶ島各郷持分高となる。なお漁業免許出願費用は総員で負担し、④の網の損料などは有川のものとする。

契約書自体にはこれ以上の細目は定められていないが、慣例によるという部分はおそらく戦後にまで引き継がれる様々な項目であったと理解してよいだろう。なお旧五島藩主にイルカ一頭を献納するという項目などは近世以来のイルカ運上の意識の残存であつたかもしれない。

明治政府は明治四十三年に漁業法の全面改正を行う。これが戦後の新漁業法と対比される明治漁業法である。有川漁協の綴には先の契約書に続いて「特別漁業免許願」が収められている。これは大正三年七月九日付けで「第二種漁業海豚漁業」について明治漁業法の規定による二〇年間にわたる許可を求めたものである。

有川湾におけるイルカ漁業を制度の上で確認すれば、正式の許可を受けた上で、旧来の慣行を維持しながら近年まで継続されてきたということができる。つぎに文献によつて明治から昭和戦前期におけるイルカ漁の具体的様相、すなわち発見・追い込み・捕獲にいたる一連の作業を紹介しておこう。

有川湾におけるイルカ漁については明治二十九年（一八九六）に長崎県が刊行した『長崎県の捕鯨と鯨<sup>24</sup>』に詳しい。

内容を摘記すると、まず漁場は有川・魚目の両湾内、捕獲対象は「にゅどう鯨」<sup>25</sup>（世俗ほうずいるかと云）と「はすいるか」（世俗まゐるか）と云の二種類。漁期は不定だが秋冬春が多い。沖で鯛釣りなどをしている船が群れを発見すると、衣服や苦を高く掲げる。その合図を見て他の船が一斉に集まり、まず先導

役のイルカを見つけてそれを湾内に向けるようにし、陸からも一斉に船を漕ぎだし「数十百ノ漁舟、鯨魚ノ隊列ヲ三方ヨリ围绕」して追い込む。そして鮪網用の張切網をもって立廻し、その内側に「繫網トテ総長サ大凡二百五十尋ノ藁縄網ニ、網葉トテ五六寸廻リノ竹三本宛ヲ束ネテ之レガ浮ケトナシ、立廻網ノ内側ニ張り廻ス。之レヲ繫網ト云フ。其繫ギ網ヲ入レタル後藁縄網ヲ入レ、其後部ニ格子網トテ麻製ノ網ヲ添エ、以テ鯨ヲ浜辺ニ引寄セレバ、漁民等裸体ニテ海中ニ入り鯨ヲ小脇ニ懐キ込ミ、鰭ノ下ヲ撫ツレバ、鯨自ラ海浜ニ飛ビ上ル。之レヲ綱ニテ尻尾ヲ縛リ引上ゲテ、咽喉ヲ刺シ殺ス」。常時イルカを見張っているのではなく偶然に発見したイルカを湾内に追い込み、マグロ用の網を流用して囲い込んだのである。なお、群れの発見者については「一番二番三番見附」として漁のあとで多額の賞与が与えられる。同書付随の絵には海岸で網を引いたりイルカを抱えている様子を描いた図が挿入されていて漁の実際をうかがうことができる。またイルカ漁の成果は湾内沿岸村落の総戸数に配当されるという。

さらに昭和九年（一九三四）に刊行された『五島民俗図誌』には、イルカ漁の記事と写真が掲載されている。捕獲対象となるイルカは「入道いるか、はんづいるか、かまいるか、ねづみいるか等」で、「魚群を発見すると、全村の船を動員して有川湾内へと追ひ込み、網で海岸へと攻め寄せ、渚近くなると、漁夫は海中に飛び入って、海豚の脇鰭下をこそぐる、さうすると海豚は自ら渚の砂上へと馳せ上って仕舞うので、それを棒で撲殺するのである。これに使用する網は頗る荒目のもので、海豚の脱出するには充分に可能なものであるが、然し海豚等はそれで

も恐れて決して逃げようとは」しないところある。写真を見ると背景に魚目半島を望む湾内には四〇艘ほどの船影が認められ、この記述のとおり村をあげての漁であることがわかる。しかも、多いときには万以上もの海豚が捕獲され壮観なので漁獲の報が近村に伝わりと見物人が殺到するとある。<sup>25</sup>

つぎは戦後すぐに調査に入つた竹田亘の「五島有川湾の漁業組織<sup>26</sup>」という報告であるが、内容的には戦前のやり方と大差ないと思われるのでその一部を引用しておく。

海豚のことを昔はトンといい、「余り群をなさないが最も大きくて味も鯨肉によく似ているのがゴンドウ、一番追い込みやすく肉も味よいのがニユウドウ、油が多くて太いのがハンドウイルカ、頭の先の長い普通の海豚をハセといった」。沖でイルカを発見すると着物ジルシといって着物を高くあげて合図をすると陸の人が「海豚ぞ、海豚ぞ」と叫び、何の仕事をしているも海豚漁には必ず出る。そのあとの行動は『長崎県の捕鯨と鰻漁』と同様であるが、追い込みに要した費用のことをセイゼイ料といい、浜料とともに総額から引いた金額を村々に配分するとある。

また見物の群集の中からちよいと出てきてタテガラ(背びれ)を切つて逃げる者がいるが、かたちだけ追いかけても取り返すことはない。これをカンダラという。昔から「海豚の浜のごと」という言葉があつて皆カンダラをする。仲の良いものが組んでカンダラしたのを仲買が安く買うこともある。カンダラは鯨とイルカの時だけに使う言葉で、マグロの時はナイショモンといつて発見されるときつく罰せられるなど、竹田の報告には注目すべき視点がいくつもある。

## 5 戦後のイルカ漁の実態

有川漁業協同組合所蔵のイルカ漁関係の綴のうちの一冊に「海豚許可申請書」という表題の冊子がある。これには昭和二七年から三年ごとに長崎県知事あてに提出した漁業許可願が綴じ込まれている。また黒表紙の「自昭和二十八年度 至(空白)海豚勘定書」は表題のとおりイルカ漁の度に捕獲頭数、全体の漁獲配分、有川内での配分について年次を追つて綴つたものであるが、イルカ漁をめぐる規定や有害動物として駆除対象とされたときの文書なども含まれている。

最初に引用するのは、「海豚許可申請書」に付された申請理由書である(これに付随する「いるか追込漁業事業計画書」から漁の実態を知ることができるので本稿末尾に資料として掲載した)。

### 申請理由書

海豚追込漁業は他町村に其の類を見ない漁法として徳川年間より発達し現在に至りては漁業の文化保護財とも云うべく有川湾に於ける特別漁業として一般の良く認識する処であり此の湾に面せる有川・魚目・北魚目の各漁民と海豚とは其の経済的なつながりに於て缺く事の出来ない密接な関係を有し他町村の想像をも許さぬ迄に深刻且つ重大であります

したがつて此の漁法の持続と此れが権利化擁護には三ヶ町村漁民等しく熱望する処であり漁業法の改正を契機に真剣に論議されたのであります

従来は特別二種海豚漁業権として独占排他の中に旧来の慣習持分を踏襲し相協力し捕獲に従事し三ヶ町村漁民自からの機構によつて自主的に解決して来たのであります

然し此れが営利的な性格を持つ第三者の個人或いは網組織等によつて無秩序に乱獲されたとしたら民主的時代の要請によつて改革をなさんとする持分の調整も三ヶ町村漁民の経済的な環境の連鎖も伝統的な此のほこりも水泡に期し有川湾における総合利用をも遂に相剋の場と化し海豚漁業も茲に終止符を打たねばなりません

先に此の事を憂い飽く迄も将来に向つて本漁業を維持し其の行使を容易ならしめるためには三漁協協力して有川湾に於ける唯一の許可となし之を獲得するに外ならぬとの結論に達し共同申請をなす事に意見の一致を見たのであります

何卒本漁業の過去に於ける実態と将来に於ける特種性を御考慮の上許可相成度お願い申し上げます

昭和二十七年一月二十三日

三ヶ漁協代表

有川町有川漁業協同組合  
組合長理事 高井良朝治

長崎県知事 西岡竹二郎殿

昭和二十四年十二月の漁業法改正（二十五年三月施行）にもなつて有川湾内における海豚漁の権利を南松浦郡有川町・魚目村・北魚目村三ヶ町村の協同組織に認めてほしいという申請である。文面からわかるように、イルカ漁が江戸時代以来の伝統的漁法であつて文化財にも匹敵するものであること、三ヶ町村の経済にイルカ漁が大きな位置を占めていることなど述べられている。じつはこの申請にいたる前、昭和二十五年十二月二十五日に三ヶ町村の漁業関係者が集まつて「海豚狩込網」を自由漁業とすべきか、許可漁業として申請すべきかの会議を行つ

ている。その趣旨は「海豚狩込網の歴史は相当に古く吾々の祖先が紛糾を重ね血を流し或は死を以て今日の制度を確立したもののだが、封建的臭も残っている。そこで新漁業制度の精神に則り子孫に対する置土産として完全なる制度を残した」と説明された。これに対して反対者はなく、有川湾の範囲、漁に際しての稼働配分率、個別配分は世帯数によるか、漁協組合員数によるかなどが審議された。前者は問題なく決まったが、問題は必要経費を除いたあとの個別配分について、三ヶ町村の配分比率を六三三とするという案に対し、魚目村が反発して紛糾した。そして最終的には次のかたちで成案を得たのである。

有川（四割） 魚目（まず残り六割から五分を取り、その残りを北魚目と折半）

なおこの許可申請書に付随する事業計画書には使用する用具などについての記載があるので資料として翻刻しておいた。

この申請は三か年をもつて更新されるので、この綴りには昭和三十四年七月付けのものまでがある。

その後のイルカ漁の実績は表のとおりで、資料が残っている限りでは昭和五十八年五月二十三日に二二頭のハナゴンドウを捕獲したのが組織的なイルカ漁の最後となっている。なお、その間にあつて昭和三十五年七月の捕獲に際しては上五島高校の職員生徒一同が見学を訪れ「壮観を実地に体験し上五島ならではの感を一層深め」たうえにイルカ一頭を貰っている。また五頭が西海水族館に売却されている。この段階ではイルカの捕獲あるいはイルカ漁そのものに対する疑問は全くなかったとみられる。しかしやがてイルカの回遊がブリやイカなどの漁獲に甚大な影響を与えるということが問題とされるようになり、昭和

表4 長崎県南松浦郡有川町における海豚捕獲頭数 (昭和26年9月～58年5月)  
有川漁業組合蔵「海豚勘定書」(2冊)より作成

捕 獲 年 月 日	捕 獲 場 所	捕 獲 頭 数	種 類 な ど
昭和26.9.9	浦桑	34本	
〃 .9.10	茂串浜	22	
27.8.4	浦桑	35	
28.8.3	浦桑浜	43本	
29.8.9	茂串	214	
〃 .8.23	蛤浜	28	
〃 .10.27	〃	83	
30.2.24	茂串浜	63	
〃 .3.2	浦桑浜	24	ゴンド
31.1.5	〃	22	
〃 .1.13	〃	291	
〃 .9.18	〃	440	鼠ハセ
33.1.7	茂串浜	98	
34.9.12	蛤浜	15	白ハンド
35.7.13	茂串浜	409	ハンド①
〃 .〃.14	〃	154	〃
〃 .12.19	〃	7	ゴンドウ・ハセ②
〃 .〃.20	〃	77	ゴンド(50), ハセ(27)
37.11.2	浦桑・蛤	65	ハセ・ゴンドウ(蛤39)
〃 .〃.3	茂串	88	ゴンド(14), ハセ(74)
38.11.28	〃	201	
45.9.18	蛤浜	7	
46.9.23	浦桑	22	③
〃	〃	8	
48.2.8	〃	86	④
49.5.17	〃	35	
〃 .10.31	似首浜	105	
50.5.8	蛤浜	2	白ハンド
〃 .8.16	〃	1	競売
〃 .10.8	〃	2	白ハンド, 突上り, 競売
〃 .11.26	浦桑浜	312	
51.3.22	〃	108	はせ
〃 .5.9	蛤	32	ハナゴンドウ
〃 .8.22	蛤浜	1	ハナゴンドウ
〃 .12.7	赤尾浜	52	沖ゴンドウ
〃 .〃.10	蛤浜	113	はせ(小型)
〃 .〃.15	浦桑浜	159	バンドウ
55.11.27	似首	86	
58.1.15	蛤浜	183	白ハンドウ
〃 .5.12	浦桑	43	ハナゴンドウ
〃 .〃.23	茂串浜	22	ハナゴンドウ
? .11.29		186	⑤
? .?.21		21	⑥

①, ②翌日にわたって2日間に取り込んだもの

③同日に2回立った

④1頭あたり5000円で計43万円が捕獲補助金

⑤12月1日に123本(ゴンド57, ハセ6)を揚げたが、前2日63本と注あるためその合計をとった

⑥五ヶ郷の勘定のみ

四十九年九月一日に長崎県では「長崎県イルカ駆除対策事業報償金交付要領」を作っている。さらに五十三年六月十五日、イルカはヒトデ、クラゲなどととも「有害水産動物」とされ、その捕獲にあたっては「有害水産動物対策事業」の捕獲処理費として想定された一万円の二分の一が補助されることになった。この表のなかで昭和五十五年十一月の場合、一頭あたり五〇〇〇円、八六頭合計で四三万円が交付されている。その場合のイルカの肉は「自家消費」として報告されている。なおこの時の捕獲状況についても報告があるので一部を抜き出しておく。

「昭和五十五年十一月二十七日朝小串港附近にイルカ大群游泳中の報を受け、定置網被害の影響を考慮し、魚目漁協との連絡を計り魚目、有川の両共栄団（注、定置網の組織名）の協力により似首へ追込む、約五〇〇頭。直ちに捕獲作業にかかるも干潟なく水深深く八六頭捕獲したるのみにて翌日の作業に持越す事となる。翌十一月二十八日北東の風強く事故誘発の恐れがあり捕獲作業取り止めとする。似首港附近の畜養業者より損害補償の声高まり、魚目漁協としても日延する事も出来ず遂に網を解き逃がす」

これによると五百頭ほどのイルカを網で囲い込んだのだが場所が悪くて八六頭しか取り込めず、翌日にもちこしたところ気象条件が悪くなったために逃がしたという内容である。イルカをもつて有害動物とする認識が、定置網業者や畜養業者の間に高まっている様子がうかがえ、そのことがイルカを「駆除」する政策につながっていることがよくわかる。

文献からみたイルカ漁の推移の概略は以上のとおりである。次に一九九四年七月の現地調査をもとに、地元研究者のレポー

トなども参照しながら、近代のイルカ漁の実態と当地の特色をまとめてみよう。

## 6 聞き書きによるイルカ漁の実際

### ①イルカの種類

浦桑在住で祖父君神社の総代でもある寺田健一郎さん（大正六年生まれ）によると、イルカのことはユッカといい、ここで捕獲されるイルカの種類は以下のとおりである。

ゴンドウ

鯨に似ている。潜水夫のような頭をしている。いちばん美味しい。

シロハンドウ

身体に白い模様がある。

ハセ

口がとがついていて、身は柔らかでゴンドウについて美味しい。

ネズミ

ハセよりも小型。体長が小さい。以前はシャチがとれたこともあった。

### ②組織と捕獲方法

イルカ漁は旧村名でいうと、有川村・魚目村・北魚目村の三か村の共同だが、北に位置する北魚目の浜にはあまり入らないので、実質的には有川と魚目とが行う。茂串の海岸に追い込む時は鏡瀬の脇を群れが通ってからタテキリをする。ただし似首（北魚目村）や蛤（有川町）でとったこともあった。もと教員によると、海豚があがったので授業を休んで見学に連れていったことがあるということだった。

イルカ発見の合図は誰かが叫べばよい。全体の指揮者は有川か魚目のどちらから出る。追い込みの時の船は一〇〜二〇艘くらい。コシアミ（格子網）。ちょうど地引網のように両端を岸

から引つ張つて近くに寄せる。コージアミともいう)を積んだ船に乗るのは若い人が多い。最初に「ハリサシアミ」といって目の大きなものを使用する。イルカが抜けようと思えば抜けるほどだが、逃げることはない。浜に近づいたらコシアミを入れてさらにイルカを追いあげ、岸近くなったらコシアミをしぼり、若い人が海に入つて追い上げた。汐の引く時に網を引くが、自分から浜に上がってしまうものも多い。どうしても何頭かは逃げる。昔は茂串の浜の方がとれたが、のちは浦桑の方が多くなつた。銛は使用しなかつた。網は有川と魚目とで半分ずつ持つていた。ただし近年は浦桑はガタ(潟)のようになつていてそこでとれたイルカを食べると必ず下痢をした(それだけ海が汚れてきたということ)といい、浦桑のイルカを食うと医者が繁盛したなどという表現もあつたという。

イルカはあまり暴れない。イルカの喉元を「ヒエ」という。ここを一気に刺して血を抜き、またタテガラを取る。浜の後片付けは若い者が行う。

### ③ 配分

群れを発見した一〜三番船は後から好きなものを一本貰えるので、オカにあげたイルカの上に一〜三番と書いたボール紙を載せた。内臓も配分した。魚目の場合、配分されたものをさらに集落内の班に分けてから各家庭に分配する。腸のことはヒヤッピロというが、これも各家庭に平等にわけける。ヒヤッピロはしごいて中身を出してから割り、塩にして茹でて切つて食べる。肉よりも美味い。骨も同様にわけける。骨にも身がついてゐるからで、鍋で煮て身をとつたあとの骨は捨てた。頭は欲しい人が貰つていつて油をとつたこともあるそうで、それでアゲ

油にしたともいう。田圃にさす油にも使つたが、その場合はフカのワタも使用した。なお昭和四十年代のイルカ漁を記した『有川郷土誌』によると、「特に内臓には名前がつけられていて、肺をフクロワタ、胃をイシワタ、脾臓をマメワタ、小腸・大腸をヒヤッピロ・ジュズワタと呼ばれ、肉よりもいける」とある。またハレの日に作るナマスには酢になじませておいた魚の切り身か鯨やイルカの皮身を混ぜる。三月のお節供にも鯨やイルカの臓物が他の食財とともに調理されるという<sup>(28)</sup>。

配分は北魚目村の分は「イタミシロ」ともいうべきもので、定置網を傷めたり、機関船が漁の邪魔をしたことに対する保障的な色合いがこい。組織を支配するのは漁業組合である。イルカをあげる時には慣れた人に指導を頼む。各集落では組合の役員が腕章をつけて現場をまわる。船のアカバにこっそりイルカを隠す者もいた。このことを「カッパリ」という。かっぱらうから来た言葉らしい。イルカの発見船には全体で一〜三番船まで報償があり、また魚目でも魚目の中だけの一〜三番まで報償がある。

群れの発見者に対しては、「役船」といって、一〇〇本以上の時は一本ずつ三番まで、以下の時は一本を三船でわけた。

「浜料」とは、陸あげして処分するので有川・魚目・北魚目にわけけるが、イルカの上がつた浜に対して払う。冬は寒いから暖をとるために婦人会の人が薪を焚いてくれる。それもこの分に含まれる。

「宿料」は、漁協の人が評定したり事務をとつたりする費用。総指揮委員とは、総大将のことで、櫓船などの指揮をとる。てぬぐい、帽子などを目印にして指揮をとつた。

「泳ぎひえさし」格子網（マニラロープで作る。普通の網は藁縄製が多かった。この網は若い連中が汐の引いた時にはりめぐらす）で浜の方に引つ張つて来ると、若い人が海に入り、イルカの尾に綱をつけて陸上の人に引つ張らせる。自然にあがつてしまうイルカもいる。ヒエサシとは心臓に大包丁をサツと入れることで、血が吹き出す、この血を出さないと食べられなくなってしまう。以前、杓岐島でイルカが捕れたと連絡があつたので船で貰いに行つた。最初は久し振りのので喜んで食べたが、血抜きをしてなかつたので、二度目はどうしても食えなかつた。杓岐の人は食い方を知らないのである。そこで捕鯨の経験者から電話をして血抜きをするように話したことがあつた。

「監視船」は、カンダラを防ぐため。一本を船に隠したり、イルカの身を部分的に切り取つて食べてしまう者がいる。切つたらすぐに醬油をつけて生で食べてしまうという。

有川の海童神社前に三功労者の石碑が立っているが、このあたりは昔は島でそこにイルカ網の倉庫もあつた。碑文は三か町でイルカ漁のルールを作つたことを讃える内容で、それ以前は肉の配分などをめぐつて喧嘩だった。

イルカが一〇〇本以上とれた時は、一本ずつお宮（祖母君神社）に奉納する。供養塔の前でイルカがとれるように神主に拜んでもらつた。

#### ④ 漁をめぐる紛争

昭和三十三年一月七日、茂串浜にイルカが立つた。この日の漁獲は九八本、ネズミとハゼの混獲である。この時の配分内容の原文を資料として載せたが、じつはこのあと有川漁協理事から某郷あてに「海豚捕獲稼働に関する警告」が出された。それ

は追い込みの実績をもたない某郷は配分だけを受けるという立場にありながら、「海豚捕獲ごとに凶器を持ち委員の制止を聞かず遂には海豚切り取りを行い果ては凶器を手に暴言を吐く等悪質的行為がしばしば繰返されて」いるというのである。

この背後にはまさに伝統的なカンダラの慣習を見ることができよう。しかし時はすでに昭和三十年代である。そうした旧慣が黙視される時代ではなくなっていた。おそらくこれ以外にも日頃からの行き違いがあつたに違いない。この問題をきっかけに三月十一日、三漁協海豚協議会が魚目漁協会議室において開催された。「最近一、二回秩序のない海豚の捕獲をなしており、此の件につき協議会を開く」ことになったものである。ある委員から、「終戦後人口の増加は著しいが、それに反し海豚の回遊は減少してゐるが、此の捕獲について少い海豚を多数の人員が出て捕るより、各地区に分けて捕る方法は如何」という発言があつたが、これは保留とされた。また混乱を避けるために全体の総指揮者をあらかじめ決めておく案も出されたが、これは従来どおり現場において協議のうえ一名を選出し赤色の指揮旗をもって統制をはかることになった。また各区ごとに責任をもつて秩序を保つべし、という提案は現段階では不可能であるので警察官の協力を要請することに決定した。きつかけとなつたイルカ持ち逃げの件は、おおよその金額を弁償することで決着をみた。

#### 7 海豚神

有川湾におけるイルカに関しては漁の実態とともにきわめて興味深い事例が報告されている。それは前出の竹田旦の報告にあるもので、「浦桑・茂串には海豚の神さんとして、弁天さんを

祀っている。浦桑のは市拝神といって、氏神の境内に合祀してあるが、旧六月一日に魚ノ目の人々が集まってお祭りした。海豚が立つのは、この市拝神を拝みに来るのだという。茂串の弁天さんは、石造で地藏さんの形に似ている。海豚の寄ってくるときは、心ある人がその顔を絵具で赤く塗る。高麗島陥没伝説に祭神の顔を赤く塗ったために一夜にして海中に没し去ったという著名な話があるがここでは同じような習俗が最近まで生き残っていた。恵比須などの漁神は赤色を好むということを各地でよく聞くが、それと関連のある伝承と見てよいものであるという。

まづもつとも特徴的なことは、ここにイルカ神とも呼ばれる神が祀られていることである。同じ五島列島の福江島の三井楽で海豚神といえ、捕獲したイルカの供養碑であったが、ここではイルカが参拝にくる神であると認識されている。この神は市拝様（いちはいさま）と呼ばれ、浦桑の祖父君神社に合祀されている。なお有川には祖母君神社（現在是有川神社に合祀）があり、祖父君神社とは夫婦であった。神社前が埋め立てられるまでは海上に小さな岩があり木の鳥居が建っていた。その岩は有川の祖母君がここに来る時に憩った場所だという。イルカはこの市拝様を拝みに来るのだと言われている。市拝様は事代主命のことで、イルカ神様と呼ばれている。御神体は二尺五寸ほどの彩色の木像であるとされるが見た人はいない。元来どこに祭られていたかは不明である。近くの集落でもエベス様を祀っており、なかで似首のエベス様は浦桑の分かれだともいう。有川にも恵比寿神社がある。宮司の宮田紀久さんによると、祖父君神社は、今は埋め立てられたが海中に浮かぶ「イタツシケ

島」に鎮座していた。三つの島の中央が父の瀬、右側が母の瀬、左が子の瀬ということで、父はイザナギ、母はイザナミの尊だという。

新しいイルカがとれるとタテガラ（背鰭）を祖父君神社に供える。タテガラは上部に細長く切れ目を入れてそこに紐を通して軒に吊るしておく。調査時点でも社務所に数年前のものが二枚保管されていた。この祖父君神社では神饌として必ずイルカを供える。

祖父君神社の例祭は竹田の報告時点では旧六月一日とあるが現在は七月一日で、この時に最も新しいタテガラを三方に載せて奉納する。それは後に宮司が持ち帰る。市拝神社は旧魚目村の神様であったから、現在も祭りは旧魚目村の集落で作っている魚目漁協が主催して行う。四つの集落で、浦桑・榎津・丸尾・似首である。昔は年に何回か「イルカがたつた」イルカが入ってくることをいうので、その新しいタテガラをあげた。もともとイルカがたてば、とれたイルカのうちの一本をお宮に奉納する習慣だった。そのタテガラは保管しておき、肉は漁協関係者でわけた。

なお「イルカ漁あるごとに二頭、鯨漁ある毎に一尺五寸又は三寸方のものを九個献ずることが例とされていた」という。<sup>28)</sup>

この浦桑の浜にイルカがあがると近在から大勢の人が集まって市がたつた。そこで祭られたのが市拝神だといわれる。また、例祭日には網代の場所を交代するための会合が開かれていたという。

例祭日には、昭和四十四、五年頃まで、「押し船」櫓押ししの競漕」が行われたが、現在は行われていない。宮司の宮田紀久さんから提供された「由緒三関スル調書」によると、当社の祭神



図7 赤く塗られた痕跡のあるえびす像  
(長崎県南松浦郡有川町茂串、  
1994年7月撮影)

は、伊邪那岐命(文明五年創立)、事代主神(享和三年創立)ほか二柱で、「魚目村似首郷・榎津郷・浦桑郷ヨリハ御初穂一封御酒壺樽充奉幣使参向ノ時之レヲ献ズルノ例アリ」とされる。当社は福江藩主の保護をうけ八石九斗四合の社地があったが、寛文四年に富江藩に属することになって参石五斗六合を増加され社殿も改築された。祭日は十一月一日である。

さらに由緒によれば、「六月一日ハ一(市)拜大人ヲ事代主神トシテ祭祀シ大祭当日ハ前拾壺月朔日ト同様地方上席代官奉幣使トシテ参向護衛者ハ両魚目村浦役人庄屋加徳小頭等ニシテ未社奉仕ノ神職前日ヨリ出勤事務助勤前二同ジク充モ異ナル慣例トシテハ此ノ神ニ祈願トシテハ七月拾四日ヨリ拾六日迄三日間午前ハ五丁建テノ競漕各郷ヨリ壺艘宛計五艘浦起シトシテ神前ヲ起点トシテ催シ午後ハ各郷年順番ニ大漁祈願トシテ芝居ヲ奉納シ来リシガ維新後明治拾八九年頃ヨリ此行事廃タリシモ古来ノ慣例タル当日ハ必ず鰻ノ吸物及赤飯ヲ用ユルト」という記載がある。

これにより、イルカのタテガラは事代主命すなわちエビスに奉納されるものであることがわかる。競漕は先に見たように昭和四十年代まであった。

宮司の宮田紀久さんによると、祭礼に際して最も新しいタテガラを三方に載せて奉納した。近年はイルカ漁がないので、定置網に入ったイルカのタテガラを漁協が保管しておいてそれを用いる。今はもう体験者はいないが、昔はこのタテガラで吸い物を作って直会に用いたという(鯨の吸い物は、静岡県でも戸田村で勝呂家の正月祝いに紀州侯から拝領した鯨肉で吸い物を作ったという記録があるが、イルカに関してはまだ聞いたことがない。その意味でこれは重要な慣行であるが、残念ながら詳細な記録はないらしい)。

この祖父君神社から岸壁に沿って南に歩くと茂串の海岸に出る。竹田の報告による弁天さまは海のすぐ脇に安置されていた。茂串の古老からはすでに同じような体験を確認することはできなかったが、実はここで祭っているのは弁天様ではなく、えびす様であること、漁のあとではないが、この石像を管理している人が、昔は赤かったという記憶によって、何年か前に石像を赤く塗ったそうだという話が聞けた。そこで、当人に尋ねたところ、確かに赤く塗ったのは自分だが、以前そうだったという記憶にしたがったままで、逆に神主さんにそんなことをしたら異変が起こるぞと叱られたということであった。しかし、このことから、以前には赤く塗る習慣があったことは確かだと推定される。なお、この石像にはまだかすかに赤い色が残っていた。

# 付記

さきに沓岐島にはイルカ食の習慣がないという話を紹介した。沓岐島の東側に位置する長崎県沓岐郡芦部町の場合、明治十年編纂の「郡村誌」によると石田村の主要海産物には挙げられていないが物産の項に「江豚 一年ノ高分明ナラス 肥前肥後二輸送<sup>(29)</sup>」とあり、また箱崎村でも具体的な産額を記された鯨や鰯などの末尾に「江豚 鰯 鰭 以上筑前へ輸送<sup>(30)</sup>」と記されている程度である。イルカは本格的な捕獲作業は行わないがたまたま条件がそろったときに捕るといった、ごく付随的なものであったと推定されるが、食習慣の存否は不明である。

隣町の勝本町においても、イルカはブリ漁などの通常の漁業活動に大きな打撃を与える海のギャングとして認識されていたが、捕獲の対象にはなっていない。そしてとくに漁業被害が頻出しはじめた昭和三十年代末からイルカは駆除の対象となり漁協では各地のイルカ捕獲技術を導入して本格的な駆除に乗り出し、ときには千頭を超えるイルカを捕獲して処理した。これが世界に報道されてさまざまな批判が寄せられ、ついに昭和五十五年二月、ケイトというアメリカ人が勝本港外の辰ノ島でイルカを囲い込んであった仕切り網を切ってイルカを逃がすという、いわゆるケイト事件が発生するまでになった。事件の推移についてはここでは触れないが、町ではイルカ供養碑建立を昭和五十三年に計画していて、ケイト事件のあったと同年に辰ノ島に建立している。また婦人会などでイルカ料理を工夫し試食会を開いたりしている<sup>(31)</sup>。供養碑建立もイルカ食も近年のことであるので、沓岐島には組織的なイルカ漁はなかったという

ことであろう。

## 《注》

- (1) イルカはハクジラの仲間では体長からみて小型のものをいう。したがって、クジラとしては小型、イルカとしては大型のゴンドウの仲間は、時によってそのどちらにも入れられる。しかしイルカ漁を行う漁師の間ではゴンドウは明らかにイルカとして認識されているので、本稿もそれに従う。また追い込み漁の対象となるのは、群れを成して回遊する暖流性のマイルカ、カマイルカ、ハンドウイルカ、ゴンドウ類などである。寒流を好むイシイルカは北海道から東北地方にかけて銚子によるツキンボ(突棒)漁の対象として個別漁業として実施されている。現在、スーパーなどで販売されているのはこの種のイルカがほとんどである。
- (2) 谷川健一編『鯨・イルカの民俗』(『日本民俗文化資料集 成・第十八巻』三一書房、一九九七年)
- (3) 中村羊一郎「海豚参詣とイルカ祭祀」(『静岡県民俗学会誌』第二四号、二〇〇四年)
- (4) 『日本庶民生活資料集成』第十巻所収、三一書房
- (5) 現地調査は一九九四年一〇月一八・一九日、仮屋漁業協同組合のご協力を得て実施した。
- (6) 現地調査は一九九四年七月一五・一六日、三井楽町教育委員会及び三井楽漁業協同組合のご協力を得て実施した。
- (7) 三井楽町『三井楽郷土誌』一九八八年、六二頁
- (8) 前掲書五三二頁
- (9) 有川町における調査は、一九九四年七月一七・一八日に

有川町教育委員会及び谷川修一氏のご協力を得て実施した。さらに二〇〇四年二月一三日に有川町漁業協同組合及び同町教育委員会の原光安教育次長・内藤かおり学芸員のご協力を得て漁協資料の調査を行った。

- (10) 『青方文書』、資料纂集古文書編、続群書類従刊行会、一九七六年
- (11) 羽原又吉『日本漁業経済史』(上)、岩波書店、一九五二年、九四頁
- (12) 西村次彦『五島魚目郷土史』西村次彦遺稿編集会、一九六七年、五六頁
- (13) 西村前掲書九六頁所収の貞享五年(一六八八)作成「魚目浦絵図」に書き入れられた幕府への口上書
- (14) 中山友則「有川鯨組の推移」私家版
- (15) 『平戸市史・民俗編』一九九八年、四一二頁
- (16) 西村前掲書一二九頁
- (17) 福本和夫『日本捕鯨史話』改装版、法政大学出版局、一九九三年、三七〜三八頁
- (18) 西村前掲書九二頁
- (19) 西村前掲書一〇四頁
- (20) 中園成生「解説」『鯨・イルカの民俗』五九八頁
- (21) 樋口英夫『海の狩人』平河出版社、一九九二年
- (22) 前出『鯨・イルカの民俗』所収
- (23) 西村前掲書一三〇頁
- (24) 前出『鯨・イルカの民俗』所収
- (25) 久保清・橋浦泰雄『五島民俗図誌』一誠社、一九三四年刊行の一九七四年復刻版、三九八頁

- (26) 『民間伝承』十五―八、一九四七年
- (27) 『有川町郷土誌』三四頁
- (28) 『新魚目郷土誌』一九八六年、六六九頁
- (29) 『芦部町史』一九七三年、三七〇頁
- (30) 前掲『芦部町史』三八〇頁
- (31) 勝本漁業組合『勝本町漁業史』一九八〇年、四二―四三六頁

# 《資料》

## 五島列島三井楽及び有川イルカ関係資料

### 1 三井楽海豚組合同規約

(三井楽海豚組合所蔵)

#### ① 昭和十一年規約

(表紙)

昭和十一年十二月

海豚組合同規約

海豚組合

(一枚目端に「紙数表紙共百八枚」とある)

海豚組合同規約

#### 第一条

南松浦郡三井楽村浜ノ畔湾内及岐宿村字打折地先ニ游魚スル海豚(鼠海豚ヲモ含ム)ヲ漁獲スル目的ヲ以テ本規約ヲ設ク

第二条	海豚漁場ヲ出願スル場合ハ役員協議ノ上コレヲナス	第九条	海豚漁獲ニ依ル歩金ヲ左ノ通り定ム 一、二割 其ノ者ノ漁獲高(タテカラ、オバケは捕獲者ノ所有)
第三条	本組合ニ加入権アル者ハ浜ノ畔郷及岐宿村字打折、小倉住民トス		一、六割 組合員全部
第四条	加入権トシテ壱戸ヲ壱株トス 譲渡スルトキハ家督相続人ニ限ル 新規及分家加入ニヨル場合ハ金壱円以上ト定ム 但分家セザル場合ハソノ効力ナシ	第十条	一、四割 船持全部(沖出漁船ニ限ル) 海豚船(陸上流寄ヲモ含ム) 漁獲水揚集合地ヲ正山中波止ト定ム
第五条	本組合ニ左ノ役員ヲ置ク 但シ組合長及イルカ総代ノ任期ハ弐ケ年トシソノ選挙ハ本村漁業規約ニ準ズ 一、顧問 一人 一、組合長 一人 一、海豚総代 全部 一、各郷役員 全部	第十一条	歩合配当ノ場合ハ時ノ各郷役員及イルカ総代立合ノ上交付ス 但 本規約ニ違反ノ行為者発見セシ場合ハソノ者ノ郷及船全部ヘノ配当権ハ之ヲ没収ス 維持費其他ノ為メ海豚漁獲高ニ依リ役員協議ノ上総高ノ内ヨリ売却スルコトヲ得 但シ維持費は個人貸付ケヲ禁スルモノトス 一、二、三番船マデハ総高ノ内ヨリ賞与スルコト 但シ賞与額ハ役員ノ協議ニヨル (モリ)ヲ使用スル場合ハ組合長ノ指揮信号ニ従事作業ヲナスモノトス
第六条	本組合海豚捕獲時ニ於ケル指揮者ノ旗章及腕章ヲ左ノ通り定ム 一、顧問 白赤白腕章 一、組合長 白旗、白腕章 一、副組合長 白赤旗並ニ腕章 一、海豚総代 青腕章 一、郷総代 黄腕章	第十二条	主廻引揚其ノ後ノ手入ハ各郷一ケ年交代トシ其間使用シタル場合ハ格納後次ノ郷ニ引継ヲナスモノトス
第七条	組合長ハ全般ノ指揮監督ノ職務ニ任シ役員ハ之ヲ補佐シ他ハ指揮者ノ命ニ服従スルモノトス	第十三条	捕獲ニハ絶対発動船ノ操漁ヲ禁ス 但 石原吉之助氏ノ所有スル発動船ハ監視船トシ
第八条	復員ノ報酬ハ揚高ノ五歩ト定ム 其ノ他ノ報酬ハ付与セズ	第十四条	
		第十五条	
		第十六条	
		第十七条	
		第十八条	

- テ操漁ヲ認ム 監視船ノ報酬ハ役員協議ニヨルコト
- 第十九条 本組合規約ノ改廃ハ組合員過半数以上出席スルニアラザレバコレヲ為スコトを得ズ
- 第二十条 本規約第四条ニヨル株権及出漁権行使ノ場合ハ代理者ニテモ之ヲ為スコトヲ得
- 第二十一条 本規約第十六条ニヨル主廻網ニ要スル人夫ヲ三十人ト定ム
- 但シ居合セノ者トシ網揚げ乾ス迄トスソノ報酬ハ二歩トス
- 第二十二条 捕獲シタル海豚ハ船ニテ運ブコト
- 但シ立ガラハ船ニ与ヘ、尾バケハ捕獲者ヘ与ヘルコト
- 第二十三条 役員ノ捕獲ハ之ヲ没収スルモノトス
- 第二十四条 組合員ニシテ二本以上捕獲シ他人ノ名儀ニシタルコト発見シタルトキハ向フ一ケ年間全部ノ権利中止スルモノトス
- 第二十五条 諸役員ハ組合員ノ不正行為者ニ対スル<sup>(マ)</sup>所罰権ヲ有スルモノトス
- 昭和十四年旧正月五日(二月廿三日)総会決定規約
- 第二十六条 分家新加入者ニ対シテハ加入金貳円トシ、其年ノ基金割当額ヲモツテ加入スルコト
- 寄留者ニシテ同組合ヘ加入セントスル場合ハ加入金貳円五拾銭トシ其年ノ基金割当額ヲモツテ加入スベキモノトス
- 第廿七条
- 第廿八条 役員ニシテ腕章ヲ付セザル場合ハ其日ノ役員報酬ヲ与ヘザルモノトス
- (指揮旗ヲモ含ムモノトス)
- 第廿九条 総代長、副総代長ハ五名トシ任期ハ二ケ年トス
- 但シ里郷農民、釜郷農民、正山郷農民、八川農民中ヨリ四名ヲ選挙シ、打折郷ヨリ一名(総代長)ヲ選挙スベキモノトス
- 海豚ハセ・コヲツクリモ・ヤヲ取り銚一切ヲ入レズシテ陸上ニ追イ上ルコト(但シ二回トシ以後役員協議ニ付ス)
- 第三十条 船員ニシテ銚等一ヲモツテツイタ際ニハ一ケ年間ノ一切ノ権利ヲ中止スルモノトス
- 陸上捕獲者ニ対シテハ二割ノ報酬ヲ与ヘ尾バケ及ビ立ガラヲ与ヘルコト
- 但シ船持チニ対シテ其内ノ一割ト立ガラヲ分与スベキモノトス
- 第三十一条 船二十隻ニ対スル報酬ハ取上高ノ五歩ヲ与ヘルコト
- 第三十二条 組合長、副組合長ノ報酬従来ノ分金五拾円ヲ貳名ニテセツパンスル事今後ノ報酬ハ其ノ期間内ニ於テ漁次第二依リ金員ヲ以テ与ヘル事 但シ金額ハ總會ニ於テ決定スルコト
- (注 三四条のみペン書きの後筆)
- 昭和十一年旧十月二十六日創立
- 組合長 柏戸佐太郎

副組長 浦 米吉  
惣代長 石原吉之助

顧問役 白浜庄一郎  
(以下、歴代役員氏名省略)

②昭和二八年規約

(表紙)

昭和二十八年六月十九日設立  
いるか組合規約

いるか組合世話人

第一章 総則

第一条 この組合は三井楽湾に游泳する海豚を捕獲して組合員に現物配当を為し以て組合員の福利増進を図ることを目的とする

第二条 この組合は組合員のため左の事業を行う

一、海豚の捕獲

二、前号に付帯する事業

第三条 この組合は三井楽町海豚組合という

第四条 この組合の事務所は三井楽町浜之畔郷におく

第五条 この組合の経営するいるか追込漁業の許可申請はこの組合の組合員であつて三井楽町漁業協同組合並びに岐宿町漁業協同組合の全組合員の名に於て之を為すものとする

第二章 組合員及び出資

第六条 この組合の組合員として加入することができる者は左の各号の要件を備えるもの

一、三井楽町浜之畔郷、岐宿町打折郷に住所を有するもの

二、世帯主であるもの

第七条 組合員はその持分を譲渡することを得ないものとする  
但し組合員の死亡其の他正当な理由に基き家督相続人に対して行う場合はこの限りではない

2、前項但書の譲渡を受けようとするものは書面を以て役員に届出でてその承認を受けなければならない

第八条 組合員が三井楽町浜之畔郷或は岐宿町打折郷以外の地へ家族と共に移住したときは組合員としての権利並びにそれに伴う持分を失うものとする

第九条 この組合を脱退するものに対してはその出資金を没収して持分を認めないものとする

第十条 第八条の規定に依り組合員としての資格を喪失したものが再び浜之畔郷若しくは打折郷に帰郷したときは組合員としての資格並びにそれに伴う持分を無条件に復活して取得するものとする

第十一条 組合員の出資は一口とする

第十二条 出資一口の金額は五百円とし加入と同時に全額払込むものとする

2、前項の出資をしないものはこの組合への加入を認め

られたものと雖も組合員としての権利義務を有しないものとする

- 第十三条 組合員になろうとするものは住所・氏名・誓約書（加入を認められたならば規約を遵守しこの組合の有する一切の義務を負担する）を記載した加入申込書を各郷の運営委員に対し提出しなければならぬ
- 2、各郷運営委員が前項の申込を受けた時は出資金と共に組合長に届出で組合員名簿に記載せしめるものとする

- 第十四条 組合員は運営委員会の議決する賦課金並びにこの組合の負担する債務を支払う義務を負うものとする

### 第三章 役員

- 第十五条 この組合に左の役員をおく

- 一、顧問 若干名
- 二、組合長（理事） 一名
- 三、副組合長（理事） 二名
- 四、理事 六名
- 五、監事 二名
- 六、運営委員 名（この項は見え消し）

- 2、役員の任期は二年とし前任者の満了の翌日から起算する

- 第十六条 前条の役員及び運営委員は左の方法により選任するものとする

- 一、顧問 理事会の同意を得て組合長が之を委嘱す

る

- 二、組合長・副組合長・監事

三井楽町漁業協同組合並に岐宿町漁業協同組合の正組合員にしてこの組合の組合員の中から各郷選出の理事が選任し運営委員会に承認を受ける

- 三、理事 三井楽町漁業協同組合並に岐宿町漁業協同組合の正組合員にしてこの組合員の中から各郷に於て一人宛選任するものとする

- 四、運営委員

- 1、漁民代表員として各郷の漁協連絡委員（総代）を以って充てる

- 2、各郷代表委員として各郷の役員（駐在員・総代）を以って充てる

\*但し郷代表委員は、里郷・釜郷・正山郷・八ノ川郷・後網郷・打折郷の各駐在員を以って之に充てる（\*この項見え消し）

### 第十七条

- 1、顧問は組合長の諮問期間<sup>（つぎ）</sup>とする 組合長は組合運営の重要なものに付いては顧問の意見を尊重しなければならない

- 2、組合長はこの組合を統括し役員の協議に従って業務を処理する

- 3、副組合長は組合長を補佐し組合長事故あるとき又は欠員の場合はその職務を代理する \*但し一人は会計事務及び金銭の出納保管に任ずる（\*この項見え消し）

4、監事は組合の業務運営の監査を行い会計事務及び出納保管に任ずる

5、理事は事業計画及び運営委員会の決定に基づき業務執行を行う

6、運営委員は各郷の連絡及び統制を行い議決機関の構成員とする

第十八条 この組合の漁業時に於ける役員及び運営委員の旗章及び腕章は左の通りとする

一、組合長 赤旗 赤腕章

二、副組合長 赤白旗 赤白腕章

理事 赤白赤腕章

監事 青腕章

運営委員 黄腕章

#### 第四章 運営委員会

第十九条 組合長は毎事業年度一回運営委員会を招集するものとする

2、前項の運営委員会では組合長は決算書を提出して運営委員会の承認を求めなければならない

第二十条 運営委員会招集の通知は三日前に付議事項を示して之をなすものとする

第二十一条 左の事項は運営委員会の議決を経なければならない

- 一、規約の変更 但し役員の選挙に関する部分を除く
- 二、経費の賦課及び徴収
- 三、事業計画の承認

四、決算の承認

五、剰余金処分

六、必要資金の借入

第二十二条 運営委員会は出席した者を以て会議を開くものとする

2、議事は出席者の過半数で之を決し可否同数のときは議長が決するところによる

3、運営委員会の議長は組合長が之にあたる

#### 第五章 役員会

第二十三条 この組合の業務執行機関として役員会をおく 役員会の構成員は組合長・副組合長・理事・監事とする

2、役員会は過半数以上の役員が出席しなければ之を開催してはならない 但し、いるか游泳時に於ける場合は出席役員を以て開催するものとする

3、役員会は運営委員会の議決を経た事業計画に基き業務を執行する

#### 第六章 業務執行

第二十四条 この組合のいるか捕獲作業に従事する組合員は組合長並びに他の役員の指示に従わなければならない

第二十五条 いるかの捕獲は銛を使用せず「せこ」（船の集団）をつくって追込むものとする

2、組合長は必要があると認めるときは銛の使用を許可するものとする

3、前項の組合長の命令なくして銚を使用したものに対してはその者に附属する一切の権利（株主としての権利・従事者としての権利等）を一年間停止する

第二十六条 いるかの捕獲作業に従事する漁船は三名（その内二名はこの組合の組合員でなければならない）以上の者が乗船しないときは資格船とは見做さない

第二十七条 組合長の乗船せし漁船は監視船としての任務に付くものとする

第二十八条 船舶に乗船しないもののいるかの捕獲は之を禁ずる

第二十九条 組合長は必要があると認めるときは他の役員と協議の上組合所有の網で立廻すものとする

2、前項の操業に従事する者は三十人としその任命は組合長が他の役員と協議の上之を行うものとする

3、第一項の作業に従事したものは使用した網の格納について責任を負うものとする

第三十条 捕獲した「いるか」は船で運ぶものとし、その水揚げのため集合場所は正山中波止とする 但し組合長は必要があると認めるときは他の役員と協議の上これを変更すること出来る

2、「いるか」を捕獲したものは前項の集合地に於て組合長又はその他の役員に引渡すものとする

第三十一条 組合長が「いるか」の引渡しを受けた時は出席役員と協議の上第三十二条の規定に従って処理するものとする

第三十二条 捕獲した「いるか」の分配は左に掲げる基準に従つ

て行うものとする

一、役員報酬 全漁獲数の百分の六（運営委員を含む）  
但し操業時の漁獲状況により適宜変更することあり

二、一番船より三番船までの特賞 全漁獲数の百分の六  
但し組合員の制限をしない

三、四番船より二十番船までの特賞 全漁獲数の百分の六

四、漁獲者（船舶乗組員に限る）に対する特賞そのものが漁獲した「いるか」の臓腑「たてがら」「おぼけ」のみ与える

五、第二十七条の監視船に対する報酬  
従事漁船の百分の二

但し従事船としての配当量は受けないものとする  
六、第二十九条の網操業者 全漁獲の百分の六  
但し従事漁船の配当量は受けないものとする

七、特配 全漁獲量の百分の四

八、第二十六条の従事漁船配当量百分の四十とし平等配当す

但し郷配当量は受けないものとする

九、郷配当百分の三十

2 役員は理由の如何を問わず前項第二号 第三号 第四号 第七号の配当を受領できないものとする

第三十三条 各郷駐在員（若しくは郷各総代）がその郷（若しくは部落）に所属する組合員に対する配当量の配当を受けたときは直ちに之を組合員へ平等に分配する

ものとする

第三十四条 組合員又はその家族が捕獲した「いるか」の数が

三尾以下（三尾を含む）の時は組合長は立会の上これを捕獲したものに与えるものとする

2 組合員又はその家族が前項の規定を悪用して前項の数量に達する迄「いるか」を故意に逸脱せしめたときはその者の捕獲した「いるか」は没収する

3 前項の認定は役員会に於いて之を為すものとする

4 組合長は第二項の違反者に対してその状況により役員会の決議に基き他の罰を併科することができる

5 第二項の「いるか」は之を売却し組合の基金として積立てるものとする

6 組合員又はその家族以外のものが第一項の「いるか」を捕獲して組合長に引き渡したときは組合長は他の役員と協議の上之を処理する

第三十五条 組合長は維持費その他の経費に充当するため必要と認めるときは役員会の決議あるときに限り「いるか」を売却して之を経費に充当することができる  
但し百分の十以内とする

付則

1、前いるか組合所有の網建物並びに借地権はこの組合に権利の譲渡をなすものとする

2、前項の代償として前いるか組合の組合員は第十一条の出資をなしたものである組合の組合員とし且つ前いるか組合の組合員であつたに拘らず他郷へ移住したため組合員として

の資格を喪失したものが再びこの組合の地区へ移住したときも、この組合の組合員とする

3、この規約は昭和二十八年六月十九日より適用する

4、この規約は（変更条文）昭和四十一年 月 日より適用する

五十年一月

第三十六条 この組合の余裕金は三井楽町漁業協同組合に預金

しなければならない

2 この組合は現金の貸付並びに債務の保証は之をし  
てはならない

第三十七条 この組合が解散するときは役員は清算人となりこの組合の有する財産を競争入札の方法によって売却しこの組合の負担する債務の弁済を為した後に於て解散に要する経費を控除した残額を解散の決議をなした運営委員会に於て認められている総組合員の出資口数に応じて分配するものとする

第三十八条 この規約に違反したものに対しては役員会の決議に基き左に掲げる罰を科するものとする

一、その者に附属する一切の権利（株主及び従事者としての権利）の停止

二、過怠金の賦課

三、前各号の併料

## 2 有川町祖父神社由緒

(祖父神社宮司の宮田紀久氏所蔵)

### ① 由緒ニ関スル調書

#### 祭神

- 一 伊邪那岐命
- 一 八幡大神
- 一 正一位稻荷大明神
- 一 事代主神

#### 由緒

- 一 伊邪那岐命ハ文明五年拾壹月壹日創立
- 一 八幡大神ハ神座勸請年月不詳
- 一 正一位稻荷大明神ハ宝暦六年吉田殿御分靈箱入神座
- 一 事代主神ハ享和三年創立

注 本社ハ神明ノ靈顯ニヨリ文明五年拾壹月旧魚目村似首似首郷榎津郷浦桑郷ヨリハ御初穂一封御酒壺樽充奉幣使参向ノ時之レヲ献ズルノ例アリ

六月朔日ハ一拝大人ヲ事代主神トシテ祭祀シ大祭当日ハ前拾壹月朔日ト同様地方上席代官奉幣使トシテ参向護衛者ハ両魚目村浦役人庄屋加徳小頭等ニシテ末社奉仕ノ神職前日ヨリ出勤事務助勤前ニ同ジク尤モ異ナル慣例トシテハ此ノ神ニ祈願トシテ七月拾四日ヨリ拾六日迄三日間午前ハ五丁建テノ競漕各郷ヨリ壹艘宛計五艘浦起シトシテ神前ヲ起点トシテ催シ午後ハ各郷年順番ニ大漁祈願トシテ芝居ヲ奉納シ来リシガ維新後明治拾八九年頃ヨリ此行事廃タリシモ古来ノ慣例タル当日ハ必ず鰻ノ吸物及赤飯ヲ用ユルト北魚目村ヨリ福江藩主地方寧護武運長久禱願ノ為メ建立セラレシ魚目村崇廟ノ神社ニシテ總社ト称シ社知行

八石九斗四合ヲ賜ハリ藩主ハ元ヨリ地方人民ノ尊敬信仰不一方寛文四年藩ヲ分チテ二藩トセラレ本社ノ富江藩ニ属スルニ及ンデ三石五斗六合ヲ加増セラレ又同藩主ノ尊敬殊ニ著シク社殿ノ宮繕建築等凡テ藩主ヨリシテ之ヲ負担シ時ノ代官ヲシテ之レヲ監督セシメラル又当社大祭日タル拾壹月朔日ニハ地方上席ノ代官ヲシテ奉幣使トシテ参向之レガ祭典ヲ挙行シ両魚目村浦役人庄屋加徳小頭等其護衛タリ加之地方神社ハ凡テ本社ノ末社タルヲ以テ其各社奉仕ノ神職ハ皆前日ヨリ出勤シテ之レガ事務ヲ助勤シ地方村民ヨリシテハ時ニ濁酒ヲ釀シテ奉獻シ両魚目村各郷北魚目村立串郷小串郷ノ来合ヲ待チテ祭典ヲ執行スル等ハ今ニ繼續シ居レリ尚両魚目村民祈願總社タリシ縁由ハ今二境内石堀並ニ芝居奉納神前ノ場所洪水風波ノ為メ破損スル時ハ其箇所ヲ両魚目村各郷ニテ東西南北モ分チテ修繕ヲ加フルノ例アリ

現時ノ祭日ハ旧拾壹月朔日トシ旧六月朔日ヲ七月朔日ニ改訂セリ

- 一 明治四年村社ニ列セラル
- 一 明治四十二年十月二十五日神饌幣帛料供進神社ニ指定セラ

### ② 祭礼維持のための趣意書 (仮題)

当魚目村一拝の大人を尊崇して神に祭り神号を一拝神と尊称して手重く祭典を執り行ひし由緒は鰻(注 鰻)保護の原祖たるを以て永遠其の徳を追慕する所以なり依て当魚目浦漁する所の網代に關係する事件及当浦永永隆盛たらしめる善兆を表せし為め競争船芝居等の事に至る迄悉く六月一日すなわち一拝神の祭日を以て之を決議せりこれ予か言を俟さる所なり斯く由緒の

依て来たる所のもの遠き故に毎年祭典の盛なるは各位の目撃する所の如し依て毎年中祭料仕来の例も確實たり其の仕来の例法は往古鮪<sup>マゴイロイカ</sup>鰻<sup>カ</sup>（前と同じ）を以て献納せり然れども鰻を除き中古以来金錢を以て代納せり号<sup>なづ</sup>けて之を魚初穂料とすこれは加徳浦人或は下受人にて献納するの規律となるも間には未納者少しとせず斯<sup>か</sup>く滞納者多きときは仕来の例法<sup>あつち</sup>頼れんとす願くは各位格別の商議を以て各網代に等級を付せられ永遠に基礎たる規律を訂正せられて滞納なからしめんことを仰<sup>あへ</sup>て願ふ所なり然る上は毎年網主より献納金何円何十錢と網主姓名の上に記載し以て永年の記録と為さんと欲す前<sup>まへ</sup>頭<sup>づえ</sup>伝ふる処を洞察して永年維持の基<sup>もと</sup>ひを商議せられんことを仰<sup>あへ</sup>て伝ふ

明治廿四年六月朔日

### 3 有川漁協所蔵イルカ漁関係資料

#### ① 明治三十八年 鰻漁業ニ関スル契約書

今般有川村大字有川各郷住民及魚目村北魚目村住民ト共有ニテ鰻追込業免許出願ニ付有川郷住民ト上高崎、七目、小河原、赤尾、友住、江ノ浜、頭ヶ島、各郷住民トノ間ニ持分関係及分配ノ方法ニ付左ノ各条ヲ契約ス

#### 第一項 本契約当事者ノ持分左ノ通トナス

百分ノ六十八 有川郷持分高

百分ノ十二 上、高崎両郷持分高

百分ノ二十 七目、小河原、赤尾、友住、江ノ浜、

頭ヶ島各郷持分高

第二項 当事者ハ其共有高ヨリ第三項ノ費用ヲ現物ニテ控除シタル残高ヲ各自ノ持分高ニヨリ分割スルモノトス

#### 第三項 当事者共通ノ費用ハ左ノ通りトス

一 旧五島藩主へ献納 鰻壺頭

二 神仏奉納鰻 慣例ニ依ル

三 追込精励料 同上

四 小網八田料及有川郷ヨリ持出ス格子網損料トシテ有

川郷ノ収入スベキモノ 共有高廿分ノ一

第四項 鰻漁業免許出願総員ノ共有高ノ廿分ノ一二当ル繫納

料ハ有川郷ノ所有トス

第五項 鰻ニ係ル県税及附加税ハ当事者分配ノ頭数ニ割合ヒ

納付スルモノトス

第六項 鰻捕獲ノ際八田及小網ニハ有川郷以外ノ各郷ヨリモ

監督員ヲ乗船セシムルモノトス

右契約確守ノ証トシテ正本三通ヲ作成シ当事者各郷人民惣代署名調印ヲナシ有川郷民惣代逕通上高崎郷民惣代逕通友住外五ヶ郷民惣代逕通ヲ領置スルモノナリ

明治三十八年一月十四日

有川郷人民惣代

宮崎 久市 印

初村 豊助 印

中山 亀四郎 印

安永 松弥 印

江浜 太郎吉 印

荒瀬 大三郎 印

佐々木大助

宗 藤平 印

原 貞吉 印

[illegible]

差引	三九本	有川取得	四割	
此の処分	一六本	魚目北魚目取得	六割	
	二三本			
一、	一六本	三ヶ村配分高		
一、	二本	張切網特償		
一、	三本	繫網（有川取得分）		
一、	八本	追込精勵折半取得分		
合計	二九本	売却（張切網特償	二本	三、〇〇〇
内	四本	繫網	二本	二、五〇〇
			二、三〇〇	三、〇〇〇
差引	二五本			
此の処分	一、四本	中筋	二〇六戸	
一、	四本	船津	二三九戸	
一、	三本	高崎	一八八戸	
一、	二本	浜	一二二戸	
一、	二本	上有川	一二二戸	
一、	一本	茂串	三二戸	
一、	二本	蛤	四二戸	
一、	二本	七目	一一六戸	

一、	二本	一四〇	小河原	八九戸
一、	二本	二〇〇	崎浦	二五〇戸
合計	二五本	二〇七〇		一四〇六戸

### ③ いるか追込漁業事業計画書

（本文二四頁に掲載した「申請理由書」に引き続くものである。本文と合わせて完全な文書となる）

#### 一、事業主体名

- 南松浦郡有川町有川郷
- 有川町有川漁業協同組合
- 南松浦郡魚目村
- 魚目村漁業協同組合
- 南松浦郡北魚目村
- 北魚目漁業協同組合

#### 二、事業の概要

本漁業は特別漁業第二種漁業権として有川魚目北魚目三漁業会の共同の漁業権に属し現在迄維持経営され此れを跡襲し各漁業組合各々資材漁具を準備しているか追込に当り適時適切に此れを使用し追込船と協力し捕獲をなすものとし此れに要する経費は水揚高によつてまかない益金は各稼動漁民へ現物又ハ金銭にて配分し又は公共的事業団体へ拠出し本漁業の特異性を發揮し有川湾漁民の福利へ貢献せんとす

玄海灘におけるイルカ漁と漁業組織

三、資金計画

1、資金調達

科 目	金 額	備 考
一、出資金		
有川漁協現物出資	五〇八、〇〇〇	有川漁協に於て管理す
魚目 〃	四五〇、〇〇〇	〃
北魚目 〃	三一二、〇〇〇	〃
計	一、二七〇、〇〇〇	

2、資金運用

科 目	金 額	備 考
一、資材		
張切網	一五三、〇〇〇	縄三分尺二寸目合二統分
繫網	一五二、〇〇〇	〃
格子網	八二〇、〇〇〇	麻三、五分径尺目合二統分
ロープ	一二五、〇〇〇	七分三九六分三丸
縄	一五、〇〇〇	堅縄三分二五〇貫
側竹	五、〇〇〇	浮用三〇本
計	一、二七〇、〇〇〇	

四、資財

科 目	総所要量	手持数量	備 考
張切網	二張り	二張り	網地総間数四〇〇K 縄三分尺二寸目合
繫網	二〃	二〃	〃 一二〇K 〃
格子網	二〃	二〃	〃 一二〇K 麻三、五分尺目合
マニラ七分ロープ	三丸	三丸	
マニラ六分ロープ	三丸	三丸	
縄	一五〇貫	二五〇貫	
側竹	二〇本	三〇本	長さ五米丸さ四〇纏

五、労賃支給計画

1、最低保証賃金 一五〇圓

追込捕獲頭数によって相違するも現在迄の状況より一日一人一五〇圓也を下らず現物又は金銭にて配分する

2、歩合給

本漁業は他に例を見ない特別な漁法であり其の歩合給も追込の頭数状況によって相違する

海豚配分の方法を示せば左記の通り

必要経費 二割五分 現在迄の状況による経費最高額

追込稼動賃 三割 追込稼動人員へ支給す

繫留料 五分 繫納・岸留の稼動人員支給

小計 六割

	差引	四割
有川漁協	一割六分	差引頭数の四割に相当する割合
魚目漁協	一割二分	差引頭数の六割に相当する割合より五分を差引魚目取得し残り頭数を魚目・北魚目折半分配す
北魚目漁協	一割一分四厘	

以上の通りで必要経費二割五分を差引き残り七割五分が稼動漁民に現物又は金銭にて配分される事になる